「第6次パレスチナ・ガザ医療支援活動」報告

期間：2015 年 11 月 19 日～ 12 月 20 日

「第7次ガザ地区臨時医療支援活動」報告

期間：2016 年 4 月 10 日 ～ 4 月 19 日

北海道パレスチナ医療奉仕団

Hokkaido Medical Service for Palestine (HMS4P)

「第６次 パレスチナ・ガザ医療支援活動」報告

未来に向かって進むことができる力を備えているガザ　　団長　猫塚 義夫

＜目　　的＞

1）　病院・診療所における具体的診療と保健活動支援・・・「運動療法」
2）　パレスチナの医療・生活実態の把握・・・「在宅医療」
3）「占領地」での市民の日常生活（占領地・難民キャンプでの生活と定点観察）
4）　医療供給体制と医療の現実（病院、診療所訪問と支援内容の確認）
5）　障害者と難民孤児の生活と医療状況の把握
6）「戦争しか知らない」子供たちへ・・・「子供ワークショップ」開催

＜メンバー＞

猫塚義夫（団長・整形外科医）、白山晴雄（事務局・社会活動家）、井上智美（看護師）、齋藤育（教諭）

＜行　　程＞

11 月 19 日（木）	日本発（猫塚、白山）
11 月 20 日（金）	イスラエル・エルサレム着※
11 月 21 日（土）～ 28 日 (木）	西岸での活動（シュアファト RC、ビリイ村、ヘブロン）
11 月 27 日（金）	ビリン村
11 月 29 日（日）	井上さん、エルサレム着
11 月 30 日（月）	ガザ地区へ（猫塚、白山、井上）
12 月 1 日（火）～ 12 月 7 日（月）	ガザ地区での活動
12 月 7 日（月）	ガザ「出国」、齋藤育さん合流
12 月 9 日（水）	猫塚、白山、井上、齋藤
12 月 9 日（水）～ 15 日（火）	西岸での活動（シュアファト RC、ジャリコ RC、ヘブロン、ビリイ村・・・・・）
12 月 11 日（金）	ビリン村
12 月 16 日（水）	ヨルダン・アンマンへ出国
12 月 17 日（木）～ 19 日（土）	アンマンでの活動（バッカ RC）
12 月 20 日（日）	アンマン発・・・・帰国

＜在札本部＞

宮島豊本部長、クイン明美、松本一敏、猪狩柳太郎、高崎暢弁護士

■ヨルダン川西岸

Ⅰ　活動前夜の状況
　1）「IS」関係で、これまでの中で最高の慎重さで準備
　2）清田先生のパレスチナに対する思い ＝ 私達が諦めてどうすのですか！！

Ⅱ　Suafat 難民キャンプ と医療支援活動
　1）第４次インテファーダの中で
　2）検問所でパレスチナ住民の「日常」
　3）劣悪な居住環境と苛立つ子供たち・・・長期間の「抑圧と植民地支配」・・・際立つ女性たちの力強さ・・・
　4）Shuafat 難民キャンプへのイスラエル軍の「侵攻」 2015 年 12 月２日のパレスチナ人への「集団懲罰」
　5）難民キャンプでの診療
　6）「子供ワークショプ」「平和のポスター」12 月 10 日
　7）在宅医療の実践

Ⅲ　エルサレムの状況
　1）イスラム教の聖地 ＝ アルアクサモスクをめぐる状況
　2）商店街の点描・・・「侵略の一滴」

Ⅳ　ビリン村の人々　～平和行進で侵略に立ち向かう～

Ⅴ　ヘブロンの現実
　1）荒れ果てるシュハダ通り
　2）Youth Against Settlement(YAS) の活動とイッサ・アムロ氏

Ⅵ　ジェリコ・アクバドジャベル難民キャンプでの診療

Ⅶ　砂漠の遊牧民、ベドウイン集落での無料検診

■ GAZA 地区

Ⅰ　GAZA 地区への「出入国」
　1）イスラエルのよる「封鎖」と「侵攻」に苦しむ『ガザ地区』へ・・・
　2）ガザ地区の「風景」
　3）ガザの生活

Ⅱ　2014 年イスラエル侵攻の傷跡
　1）ベイトハヌーン難民キャンプ
　2）シャザイヤ難民キャンプ（Oldest GAZA）
　3）ハンユニス難民キャンプ東、ザンナ地区
　4）ガザ空港の跡で・・・
　5）南部ラファ市東、マッシュルーム地区＝黒の金曜日＝
　6）ガザ・エジプト国境ラファ地区へ・・・破壊される地下トンネル

Ⅲ　診療活動
　1）リマールクリニック
　　①　診療活動
　　②　腰痛体操・・・・DVD 作製へ・・・・
　2）腰痛体操の普及・・・・運動療法の DVD 作製へ・・・・
　3）ガザ地区最大のシーファー病院
　4）イスラエルの侵攻時、住民を救ったクエート病院
　5）ハマス政権・保健省での懇談

■ヨルダン川西岸

Ⅰ　活動前夜の状況

1）「ＩＳ」関係で、これまでの中で最高の慎重さで準備

私達は、これまで 5 回のパレスチナ行きを行ってきました。その時にも、イスラエルへの出入国にあたり様々な困難に遭遇してきました。しかし、昨年シリア・イラクに起こった過激派組織「イスラム国」（IS）の行動により、今までにも増して慎重・安全な活動が求められました。特に、注意すべきはアンマンに到着後、陸路ヨルダン～イスラエル国境を通過するためのヨルダン国内での行動でした。

これまでもパレスチナに来るごとに「IS」の情報やパレスチナ人の態度に注目してきました。その結果、毎回、ヨルダンでお世話になっていたマイスーン女史は、現在慶応大学に留学中のため、今回は安全第一を目的に、ヨルダンでの移動手段をアンマンで日本人が経営するツアー会社に依頼することにしました。料金は割高ですが、社長の坂田女史の親切で丁寧な対応に最後まで安全に行程を全うすることができたのでした。

2）清田先生のパレスチナに対する思い＝私達が諦めてどうするのですか＝

アンマンの初日に UNRWA(国連パレスチナ難民救済機構) 医療局長である清田明宏先生と今回の医療支援活動の目的と行程の説明を兼ねて食事を共にすることができました。

ここには、在ヨルダン大使館、岡本医務官も同席されパレスチナ問題の歴史と現状について意見交換を行いました。パレスチナをめぐる政治的にも困難な状況が続く中で、ともすれば短期的には展望が失われがちになるときもあるかもしれません。そうした中で、清田先生が「パレスチナにかかわる私達が諦めて、パレスチナはどうなるのですか・・・」と穏やかな口調の中にも確信に満ちた言葉を繋ぎました。

Ⅱ　Shuafat 難民キャンプと医療支援活動

1）「第４次インティファーダ」の中で、難民キャンプでの抑圧と破壊

Shuafat 難民キャンプ

11 月 22 日、ここでの医療活動は今年で 3 回目となりました。Salim 先生をはじめ、診療所のスタッフとも打ち解けることができ、現地スタッフとの信頼関係の醸成を感じることができました。早速、湾岸諸国からの財政支援で建設中の新クリニックの工事現場を案内にしてくれました。しかし、相変わらずの財政難とイスラエル軍による破壊活動の中での建設は、予想を超える困難を抱えているとのことでした。

現在の診療所のスタッフは、総数 13 名で、医師 1、歯科医 1 、看護師 4 、助手 1 、助産師 1 、検査 1 、検査助手 1 、薬剤 1 、クラーク 1 、door keeper 1 となっています。

1 日の患者数は 150 人、月 1,500 件です。週 5 日（金曜日、日曜日が休み）の診療で、7:00 ～から外来診療を開始して午前中に終了、15:00 まで在宅医療などに充てられています。

診療所には、砂漠の遊牧民であるベドウインなど難民以外の患者も受診されています。

その中には、様々な社会的問題を抱えている人や身体障害者もおり、生活困難者には受診証明書の発行や食糧・毛布（冬）を配布することもあります。

診療 Shuafat RC

一方、「民衆蜂起」が続く今日、イスラエル当局が危険人物を判定したら、そのパレスチナ人は直ちに投獄されるのが現状です。

この間の新法制定後、投石のみで投獄が可能とされており、2015 年 10 月以来、18 歳以下の子供たちだけでも 73 人が投獄され、150 人の子供が銃創を負っているのでした。

また、イスラエル軍からの銃撃（ゴム弾と実弾）で、17 名が死亡させられているのです。

シュアファトRC

イスラエル軍の難民キャンプ内への侵攻で用いられるのが催涙ガス（毒ガス）です。ガスは難民キャンプの中へ撃ち込まれ、診療所や学校へも容赦なく流れ込んできます。今回は、1,000~2,000 人の難民が様々な症状に悩ませられました。呼吸器障害・感染症はもとより、眼症状・目の痒さや腹痛・悪心・嘔吐、なかには意識障害や痙攣を起こす人まで出たとのことでした。

一方、今日の問題のひとつは、麻薬の蔓延と増加です。難民キャンプ外から持ち込まれる無料の麻薬が急速に拡大し、その後イスラエルから流入する「安価で悪質」な麻薬の標的にされてゆく・・・とのことでした。イスラエルは、難民を目に見えない、人格を内部から崩壊させようとしているのです！！！

その他、難民キャンプでの生活は、失業の増大で経済的困窮を深め、また『家庭内暴力』など、社会心理学的にも多くの困難を深刻化させていました。

帰りに、12 月 10 日に予定している「子

供ワークショップ」の打ち合わせのために幼稚園を見学し、きれいで明るい教室の中で、副園長と若い女性の先生方の明るさに希望を見出しました。（しかし、その後、12 月 2 日のイスラエル軍（IDF）のキャンプ内への侵攻で、100 名の園児ともども IDF の蛮行にさらされるのでした・・・・後述いたします）

2）検問所でパレスチナ住民の「日常」

次に述べるのは、キャンプの出入りに必ず通過しなければならないイスララエル軍の検問所の様子です。

「検問所」内部

老弱男女、およそ 100 人が無秩序に列を組んで並んでいます。今日は、すいているとのこと、明日月曜日は週初めでもあるので混雑すること必至です。噂には聞いていたが、実際に自分が並んでいると何とも言えないいらだちがふつふつと湧いて来るのです。

そのうち、横入りの若者 4 人がやってきて検問所を通りぬけようとしたら、私の隣にいた別の若者と数人の男女が抗議の声を上げ、言い合いになりました。このように、些細なことで言い合いになる・・・これも鬱積した行き場のない「怒り」の表現です。しかし、私は横入りの若者に若干の好意を寄せました。というのも、まじめに並んでいる人々を出しおくという行為には賛成できませんが、この現状を素直に認めないという「若者の率直さ」を感じたからです。

こんなことが、赤ちゃん、子供、障害者を含めてすべて住民に強制されているのです。「若者たちがいつかは怒りを爆発させ行動に移すのも当然かも」という感じがしました。

これらを通して感じたことは以下の事でした。

① イスラエルは、こうした日常をパレスチナ人に刷り込んでいるのではないか、「従順な羊」化です。抵抗する気持ちさえ失わせるやり方です。（そういう意味では、横入りの若者の行為は、前向きである）

②通勤手段・時間の無駄使いの強制は、労働時間の短縮と併せて労働の機会を奪い難民の「貧困化」へつながる。

③子供の学習時間と自由時間を奪い、学力低下と遊びの制限で健全な発育を阻害する。

そうして、回転式検問機をくぐると身体と手荷つの金属探知機検査以外、何もありません。監視窓の向こう側では、20 歳前後イスラエル兵がたばこを吸い、ガムを噛みながら雑談に興じているだけなのです。

難民の苦労を感じない、困難を解決するどころか作りだそうとするイスラエル当局への怒りが収まりませんでした。

この検問所を出ると、両側を鉄条網で挟まれた「通路」が 200 m ぐらい続き、それを歩いて東エルサレムへ出て行くのです。

こうした、徒歩での検問所通過とともに、自動車は、長い列を作らされて一台一台、イスラエル軍と入植者によるチェックが待っています。

3）劣悪な居住環境と苛立つ子供たち・・・
長期間の「抑圧と植民地支配」
・・・際立つ女性たちの力強さ・・・

天候の悪い日は、「雨の Shuafat 難民キャンプ」です。エルサレムのターミナルから 207 番の公共バスでキャンプの中へ入ってゆくと、昨日から断続的に続く雨のため、地面が濡れてジメジメ、ツルツル状態のままなのです。本来、エルサレム市当局が責任を持って、難民キャンプ内のインフラを整備しなければならないのですが、イスラエル当局の意向を受ける当局にそうした姿勢がありません。それどころか、たびたびの「侵攻」で家屋や道路が破壊されたままにされるのですから、雨が降れば、一気に環境の悪化がすすむのです。

近年、シュアファット難民キャンプの人口は、ますます増加しています。その理由の一つに、エルサレム市内での住宅建設を市当局が制限するため、住まいを求めて、この難民キャンプに「難民以外の住民」が流入し、定住することにあります。事実、キャンプのあちこちに、住宅を上に増築する工事現場を見かけることがあります。

今回、エルサレムに来て気になることのひとつに私達に対する「少年たちの悪ふざけ」を越えた行為です。私も先日キャンプ内を歩いていると急に横から来た少年に眼鏡をたたき落とされました。また、同行する女性たちに対する声掛けも度が過ぎる場合もあります。時には、私達に石や棒きれを投げつける男の子たちがいるのです。（しかし、この現場に居合わせる大人たちがそうした子供たちを叱り、制御するのですが・・・・）また、男の子同士の殴り合いの現場にも遭遇しました。

私は、こうした「子供たちのいらつき」の原因には、イスラエルによる長期間の「抑圧」とそれによる「貧困」があるのではないかと思います。「抑圧」～「失業」～「貧困」の悪循環の中で、住民がいらだち、家庭内暴力の発生も・・・・、それが子供に悪影響し、「暴力」がらみの行為に至るのではないでしょうか。これらが、さらに深刻化してくると、「占領者＝イスラエル」への反抗行為となり、それが今日の緊張状態、「インティファーダ＝民衆蜂起」へとつながることは容易に想像できるのです。

しかし、救いなのはそうした「子供の暴力」「少年たちの喧嘩」に出会った大人たちが即座に注意したり、時には果敢に喧嘩の中に割って入ることも事実です。見て見ぬふりとしないところにパレスチナ人の優しさや思いやりの深さを感じるのです。

診療の合間を縫って、白山さんが昨日作成した「平和のポスター」に、『医

療奉仕団』の英語名「Hokkaido Medical Service for Palestine 14,Dec,2015」を貼り付け、私達と難民キャンプの人々とがこれから先々も連携して行く気持ちを表明してきたのです。

一方、診療所での診察の後に、Women Society の健康診断の一環として「運動疾患」の診療を行いました。会場は、女性用施設なので、基本的に撮影禁止。ドイツのＮＧＯからの寄付で建設されたこの施設は、外観の古さとは違い色彩豊かな内装で、自費ではありますが「女性用ジム」も完備していました。ここでも、女性たちの明るさ、力強さが際立っている事を実感させられました。

4）Shuafat 難民キャンプへのイスラエル軍の「侵攻」
2015 年 12 月 2 日のパレスチナ人への「集団懲罰」

卑劣なイスラエル軍、診療所へ乱入し、幼稚園へ銃弾を撃ち込む・・・・・

今回、幼稚園に到着して園長さんとサリム医師から、１２月２日のシュファット難民キャンプへのイスラエル軍の「侵攻」についてお聴きしました。

2014 年 11 月、第 5 次医療支援でエルサレムに着いたその前日にエルサレムの中心部で、パレスチナ青年が電車の停留所に突っ込みイスラエル人の母子に犠牲者の出た事件がありました。当時、交通事故として報じられ、事故にもかかわらずその場で射殺される（これ自体、イスラエルによるパレスチナ人への横暴ですが‥）という理不尽さを感じていました。しかしその 1 年後、今度は、shuafat 難民キャンプ内にある射殺された青年の実家を破壊する「目的」で 12 月 2 日のイスラエル兵の「侵攻」が実施されたのでした。人口 6 万余人の Shuafat 難民キャンプに向けて、その数 3,000 人の完全武装の国防軍を動員して「侵攻」してきたのです。（youtube: https://www.youtube.com/watch?v=Aq_hDDJxo44）

しかし、事故を起こしたパレスチナの青年をその場で射殺したうえで、今度はその青年の家を爆破・破壊する・・・・・のみならず、難民キャンプ全体を懲らしめる・・・・・診療所に乱入に、100 人の幼稚園児と職員を 9 時間も幼稚園に閉じ込め、銃弾まで打ち込む・・・

事の本質は、事故を「口実」とした、青年の家族と青年が住んでいた shuafat 難民キャンプへの『集団懲罰』なのです。同時にその裏には、パレスチナ人の中に「分断」を持ち込む意図も含まれているのです。

「侵攻」してきた軍隊は、メインストリートだけでなく、脇道の奥まで入り込み、実弾を撃ち込んできたのでした。幼稚園の中を案内してもらうと外庭にはイスラエル軍から撃ちこまれた銃弾の跡があちこちにあり、その凄まじさを物語っていました。

幼稚園内部：イスラエル軍の侵攻（12 月 2 日）による壁の弾痕

12 月 2 日午前 9 時に「侵攻」が始まり、それが午後 6 時まで続けられました。その間、幼稚園の先生方が、イスラエル軍の銃撃から子どもたちを守ろうとし、奥のほうの安全な場所に集めて身をひそめていたとのことでした。午後 6 時を過ぎ、イスラエル軍が引き揚げた後に、各親御さんが迎えに来て子どもたちが帰宅できました。

幼稚園に銃弾を撃ち込む行動は、イスラエル軍の「狂気」としか思えないと感じますが・・・・否、そうした『感覚』だけで判断すべきではないはずです。パレスチナ人を支配し、人間以下としか位置づけることのないイスラエルの『論理』とそれに基づく殺戮行動・・・・・それは、これまで「ガザ地区」で何度も定期的に繰り返されてきた行動でした。それをここ東エルサレムでも実行されている事、それに対抗するパレスチナ人の抵抗・・・・これが、「インティファーダ＝民衆蜂起」の底流をなすものではないでしょうか。

もし、こうしたこと＝幼稚園に銃弾が撃ち込まれる・・・・が行われている中で、はたして、健全な幼児教育ができるのだろうか、「侵攻」が起きれば幼い命がいつ犠牲になるのか・・・そのもとでの生活はどうなのか・・・・・そうしたことを考えると、パレスチナの子供たちにも『何らかの役に立ちたい』という決意が固まるのでした。

一方、このスラエル軍の「侵攻」時には、難民キャンプの診療所内部にまでイスラエル兵士が侵入してきました。所長のサリム先生は、左上腕に外傷を受け、15 歳の少年が左目を撃たれ、また他の人は、頭蓋骨骨折まで受傷させられていました。

12 月 12 日、診療終了後に、12 月 2 日にイスラエル兵がキャンプ内へ「侵攻」時の目的＝「口実」となった、民家の爆破現場へ行ってきました。今日の爆破現場を見て、改めてイスラエルによるパレスチナ人への抑圧政策の理不尽さに怒りがこみ上げてくるのです。

5）難民キャンプでの診療活動

さて、私達の「本職」である shuafat 難民キャンプでの診療が始まりました。今年は、福祉センターにボランティア参加しているユダヤ人の理学療法士さんが参加して、腰痛体操や大腿四頭筋訓練などの運動療法のお手伝いをしてくれました。

看護師長さんがアラビア語～英語の通訳と患者さんへの一部運動療法の説明も行ってくれました。

また、ここでも肥満とともに多発している変形性膝関節症の患者さんがやってきます。内反膝の症例に有効な「外側楔状足底板」の適応となる患者さんも受診しました。札幌の田村義肢製作所から託されたこの装具を装着していただき、1 年後の再診察を約束いたしました。

昨日の診療所での「糖尿病デー」への取り組みについて分かったことがありま

リハビリー指導

した。、『世界糖尿病デ―』は、そもそも11月14日なのですが、今年は特別に私達がやってくる12月12日に変更していたことを明かしてくれました。何という深い配慮なのだろうか・・・・・診療所のスタッフと難民キャンプの人々の優しさに頭の下がる思いでした。

診療が終了した後、障害者を含めこの福祉センターに集う人々から私達に贈り物がありました。きれいなパレスチナ刺繍で作られた壁掛けです。そこには、赤い糸で『MAXY THANKS WITH LOVE DR YOSHIO』と刺繍されていました。私は、感激に目頭が熱くなりました‥‥「あ〜、こうして、これまで何回も医療活動を継続させることができたからなのだ」これらを作り上げている奉仕団のメンバーや支援してくれる方々の顔が頭の中を駆け巡っていました。

そして、また来年もこの「福祉センター」での無料検診を必ず実行しょうと気持ちを新たにしました。

一方、12月13日のシュアファット難民キャンプ診療所での診療と午後からのベドウイン集落の無料検診で、今回の「第6次医療支援活動」が終了することになっています。

連日の難民キャンプ行きの中で、その日により「検問所」の開閉が適当に変えられる日常の中で暮らさざるを得ない難民キャンプの生活の窮屈さを思うとやるせない気持ちになってしまいます。

午前中の診療所での診療は、これまで通りに腰痛・ひざ痛・肩こりなど運動器の慢性疾患が続きます。その場で、レントゲンや血液検査を指示すると、おおむねその日のうちに結果を持って再診してくれます。もちろんレントゲンは、CDに写して持参してきます。

パレスチナ自治政府のあるラマラ市から、セカンドオピニオンを求めて椎間板ヘルニアの患者さんがMRI画像を持参してやってきました。足に軽度の麻痺があるものの、症状が軽快しているので、当面手術を待機するとの結論を出しました。すると・・・・・その場で、その患者さんがスマホで主治医を呼び出し直接説明してほしいと・・・・・。電話では、主治医が大変親切な先生で、何度もお礼を繰り返して電話を終えました。手術を回避？した患者さんは大喜び・・・・私と記念撮影をして、1年後の再診を約束して帰ってゆきました。もう、3回も続けていると初期治療以外の患者さんもやってくるようになったのです。

6）「子供ワークショップ」「平和のポスター」（12月10日）

今日は、シュファット難民キャンプの幼稚園で「子供ワークショップ」を開催する活動です。

これは、私達「医療奉仕団」が、その活動の対象を「難民の子供を救おう＝＝＝save the children」まで広げることを目的としています。

今年から『医療奉仕団』に参加している北海道の高等養護学校教諭の齋藤育さんがその中心になって取り組んでいます。齋藤さんは、今年の春まで行っていた、ヨルダンの難民キャンプでの活動と教員としてのキャリアで、「ワークショップ」の活動をぐいぐい引っぱってくれました。が・・・・今回、幼稚園に到着して園長さんとサリム医師から、12月2日のシュファット難民キャンプへのイスラエル軍の「侵攻」についてお聴きしました。

その後、齋藤育さんが達者なアラビア語を駆使して、子どもたちに歌や、ゲームなどの楽しみを経験していただきました。札幌から持ち込んだ材料で作った模型を用いて様々な行事が次々と出てくるのです。

とすると・・・・早速、園長先生から、他の幼稚園での開催を申し込まれました。しかし、今年の予定では無理なので、次回、来年の再訪を約束して、お別れしました。

その様子を見ていると、園児たちとともにそこで働く先生方の喜ぶ様子が大変印象的でした。パレスチナ・難民キャンプという移動や出入国が不自由な環境に、日本から同世代の女性教師・看護師がやってきて交流できる事への喜びではないかと思いました。

一方、診療所での診療中に、齋藤育さんが中心となり、小児科診療室の前を借りて『平和ポスター』の展示活動を始めました。札幌で、活動を支援する方から平和を象徴する鳩の形をした手形を作成し、それにメッセージを記載していただきました。本日、診療所に来て頂いた患者さん、家族、職員からも同様の手形を作成しメッセージを書いてもらいました。それら、日本のメッセージとパレスチナのメッセージを全体が鳩の形になるように壁に展示し、『平和のポスター』としたのです。

平和ポスター

これを平和を求める日本人とパレスチナ人を結ぶ『平和の伝書鳩』になることを願って、できれば来年の再訪時まで展示をお願いしました。

今回の「子供ワークショップ」は、成功しました。私達の活動のウイングを「子供」まで広げることができるかどうかの『試金石』であったこの活動の成功を札幌に持ち帰り、次回へ向けた取り組みを準備したいと思います。

7）在宅医療の実践

診療中に往診の依頼が入り、診察を一時中抜けして、キャンプ内の往診に出かけました。

79 歳の男性で、肺炎治療後の廃用症候群の患者さんでした。自宅で実施可能なリハビリ訓練を実演し、同席していた息子さんにその方法を教えて協力を求めました。快く受け入れてくれながら‥‥患者さんが、絞り出すような声で・・・「Thank you very much」と言っていたことが今でも私の耳元に残っています。

今では、在宅医療が十分保障されない多くの患者さんが難民キャンプの寒い家の中で、「抑圧と忍従」を強いられているのではないかと思います。

次に、椅子から転落して動けない患者さんの往診が入りました。サリム先生、看護師さんと一緒に出かけました。診断結果は、骨折はなく、筋断裂（肉離れ）でしたので安心しました。

が、その家の屋上に上がると、シュアファット難民キャンプを囲む長い「分離壁」がはっきりと見えるではありませんか。手前の「みどりの木々」は、2003 年までは、パレスチナの土地であったものが、今では入植者が侵入し、現在の高さ 8m の「分離壁」が作られてしまいました。もちろんこれもイスラエルの『入植地政策』とイスラエル軍に守られていの結果なのです。

それまでパレスチナ人が住んでいる土地に、あるとき入植者がやってきて「ここは自分たちの土地だから出て行け・・・・」と銃剣を盾に土地の奪取を図る・・・・・・・

これは、戦前、日本が中国大陸や朝鮮半島で行った「植民地政策」の実態に似てはいないだろうか、そして、それは戦後の沖縄でアメリカ軍が銃剣とブルトーザーで住民の土地を奪い、米軍基地を建設してきたことに似てはいないだろうか‥‥‥。こうしたことを思いながら、「分離壁」を睨みつけ沖縄の辺野古新基地建設反対運動へ思いをはせる時間が持てました。

札幌での在宅医療でも同様ですが、患者さんの家に足を運ぶことは、患者さんの生活とその環境を実際に見ることのできます。難民キャンプの住民を生活そのものから把握する上でも大変重要な取り組みなのです。

Ⅲ　エルサレムの状況

1）イスラム教の聖地＝アルアクサモスクをめぐる状況

そもそも 2015 年 10 月からパレスチナ西岸で緊張が高まった原因の一つがこのアクサモスクをめぐるイスラム教徒と入植者の衝突でした。

私達には、想像もできないことですが、ユダヤの入植者たちが、イスラム教の聖地であるアクサモスクに乱入し、めちゃくちゃに破壊したのでした。それに抗議するパレスチナの若者たちとの間で衝突があり、その後、それに続く一連の事態が進行しているのです。武器なきパレスチナ人は、ナイフと小石・・・対するイスラエル軍はマシンガンを始めとした強力な武器でパレスチナ人を弾圧しています。

10 月以来すでに 80 名を超えるパレスチナ人がイスラエル軍に射殺されているのです。

「テロリスト」との疑いを口実に、街中での「尋問」のやり放題なことは、前回の FaceBook で紹介したとおりです。

今回、ユダヤ教の「嘆きの壁」を通り、検問を受けて長い通路を歩かされて、やっとアクサモスクと岩のドームのある広場に辿り着きました。

そこでのイスラエル軍の警備は、厳重すぎるほど厳重です。

そんな中で、50 人ぐらいの女性のグループ、5～10 の老人のグループが青空の下で「学習会」を開催していました。そこへ、イスラエル軍と治安警察に守られた入植者 5 人が「侵入」してきたのです。その時、そこにいた人々から一斉に「出てゆけ」のコールが発せられ、緊張する空気があたりを支配しました。

しかし、現在ここには若者達の入場がイスラエル軍により禁止されているので、暴力と流血の事態にはなりませんでした。

以前は、この場所＝イスラム教の聖地に入植者が入り込みアクサモスクを破壊することは想像できませんでした。にもかかわらず、目の前で実際に起こっている事実は、今までにも増して、イスラエル軍からのパレスチナに対する弾圧と抑制、イスラエル当局のコントロールが一層強化されているのを実感させられました。

すでに世界で有数の強力な軍事国家であるイスラエルを相手に、パレスチナが軍事的対決を考えることはできません。国際法違反である「入植地政策」をただちにやめさせる国際世論を大きくしてゆかなければならないと心から思うのです。

その帰り、オーストリアホスピスの前のカフェでティータイムをとり、適当に写真を撮りながらイスラエル兵と治安警察行動観察行いました。（いい場所なので、ここで毎回、定点観察所をしているのです）

お昼になると・・・近くの入植者たちも続々集まってきた。

１軒の土産物店が入植者の『指導』で道路に出ている品物をしまわせられていた。

11:30 ごろ、近くの EL-WAD Rd との交差点で、一名のパレスチナ青年が 5～６名の入植者に囲まれて「尋問」を受けはじめた。写真を撮りながら‥観察‥‥

ベルトを抜かれ、上着をはがれ、ズボンの中に手を突っ込まれでいた。一人は外を向いてまわりを注視し、他の者達は恐怖に緊張する青年をいたぶるかのよう

エルサレム：嘆きの壁と駐留イスラエル兵

であった。

こうして、入植者による、権力と暴力を背景とした商店への営業妨害、青年への無差別な『尋問』は、生活手段を制限し暮らしを破壊し、ここでは生活ができない状況に追い込みます。また、青年への公然とした「尋問」は、人間としての「尊厳」を否定する人権侵害であります。しかし、これらを陰湿に続けられていると人間としての「尊厳」や「権利」への確信が揺らぎ「従順な人間」へと変質させられるかもしれません。

こうしたことをさせない、パレスチナ人に誇りと勇気を持ち、高めてもらう支援を強めなければなりません。私達の「活動」が、こうしたことの一助にでもなればと思いました！！！」

パレスチナ青年を「尋問」する入植者

2）商店街の点描・・・「侵略の一滴」

朝から、昨日の交差点でイスラエル軍や入植者の行動をウオッチすること 30 分。

昨日ほどの緊張感はないが、昨日嫌がらせを受けていた商店はシャッターが閉まっていた。恐らく、「閉店」を余儀なくされたのであろう・・・・

こうして、一件、一件と店が閉店し、シャッター通りへと変容してゆくのです。その後、住民は、転居し始めそこへイスラエルが入り込む・・・イスラエルにとっては侵略の『点』を確保したのである。入植者によりこの『点』が沢山作られ、次にそれを結ぶ『線』が形成され、そして最終的に国際法違反である『入植地』が完成してゆくのである。

今回は、そうした侵略の流れの始まり＝『侵略の一滴』を見た思いなのです。

しかし、さらに問題なのは、そうした『侵略の一滴』は、その周りでイスラエル軍兵士によってしっかりと暴力的に見守られている事なのです。パレスチナ住民が多少とも反抗しょうものなら・・直ちに権力・武力が飛んでくる・・・・そんな状況が現在のパレスチナで進んでいるのです。（10 月以降、すでに 100 名のパレスチナ人が殺害されています）

そうした状況に思う・・・・パレスチナ側が、もっと結束して、『侵略の一滴』を具体的に止めることはできないのだろうか・・・・。住民たちがもっとまとまって、抗議の声を上げるとか、ストライキに入るとか（事実、以前は、旧市街が一日いっせい閉店したこともあったが・・・）などです。いち支援者でしかない私であっても、私情を抑えることができません。

このように「定点観測」を続けると、外国からのパレスチナの実態を学ぼうとするツアーに会うこともあります。厳しい状況の中でも心が温まるひと時です。日本からの「スタディーツアー」もできればいいかも・・・と夢を描きながら・・・です。

宿に帰ると・・・・カウンター係のパレスチナの好青年が、出勤直前に路上で、例の『尋問』をされてきました。怒りとやるせなさと悲しみの入り混じった表情が私のパレスチナへの思いをかき立てるのです。

Ⅳ　ビリン村の人々～平和行進で侵略に立ち向かう～
イスラエルの分離壁に抵抗する村～ビリン村～へ、『国際平和デモ』に参加

今日は、待望のビリン村です。ここは，イスラエルの最大都市であるテルアヴィブと自治政府のあるパレスチナの暫定首都であるラマラのほぼ中間点にあり、イスラエルが入植地を拡大する最前線です。

毎週金曜日には、非暴力の「国際平和デモ」が行われています。いわば、パレスチナにおける反入植地運動象徴でもあります。

わたした達は、今年もやってきました。ここで、運動のリーダーの一人として活躍している Haitham さんのお宅訪問しました。彼は、写真家としても高い評価を受けて、出版活動も旺盛で、欧州でも２回ほど「賞」をいただいてます。もちろんイスラエル兵の打ち込む催涙弾の只中でです。

しかし、闘う彼らは決して下を向きません。弾圧の激しいエルサレムのパレスチナ人が何かしら元気がなくて、おとなしいのと比較すると、その闘争心と未来への楽天性が際立って感じました。

さらにもう一人、「車いすのラニ―」として映画にもなった、Rani さんです。イスラエルの狙撃兵に撃たれ現在は、車いす生活ですが、昨年より血色もよく安心しました。しかし、今の悩みは、分離壁への抗議運動を記録する一眼レフカメラが壊れていることでした。

昼過ぎに「国際平和デモ」が始まり、10 数名のイスラエル兵が容赦なく催涙弾やゴム弾を撃ち込んでくる・・・それに対してパレスチナの若もには決してひるまない・・・一進一退がが続きます。

ビリン村の友人

そのうち風向きが私達のほうに向かい催涙ガスにまかれかかる状態になりました。涙が流れ、咳き込んで呼吸困難となり、嘔吐も始まる・・・・まるで致死量以下（すれすれの）毒ガスかと思うほどなのです。

このデモには、若いイスラエル人３人とイスラエルの精神科医も参加していたのが嬉しかったです。

この日の「国際平和デモ」を終えて、かの Haitham さんのところで昼食をいただき、エルサレムへの帰途に就いたのです。

さて、この時に「イスラエルで最も厳しい」カランディア検問所が待っています。昨年は、この時期にパレスチナ人の抗議デモに出くわし、イスラエル兵の自動小銃の『水平打ち』に会っていたので、いささか緊張してそこに向かいました。

ことしは、穏当な状態でしたが、運よく二人の日本人の方にお会いすることができました。一人は、ナジャハ大学で開催された学会に出席したドイツ・ミュンヘン大学教授、もう一人は、著名な出版会社を退職し、世界を回り、ビリン村にも行った若手ジャーナリストです。

帰りのバスの中とその後のレストランで、パレスチナと欧州をめぐる様々な意見、日本の政治と国民性、などについて話が尽きませんでした。（これも旅の醍醐味か・・・）

そして、２週間後の金曜日、今回の行程の中で２度目のビリン村行です。今回は、白山さん、井上智美さん、齋藤育さん、と私の４人で訪問することになりました。

前回と同じように、フォトジャーナリストのハイサム氏宅にお邪魔し、この２週間のビリン村の様子を伺いました。

一週間前の金曜日の「平和デモ」の時には、イスラエル軍が村の奥深く侵入、数件の住宅内まで入り込んできたとのことでした。12 月 2 日のシュファット難民キャンプでのイスラエル軍の侵入などと合わせると、イスラエル当局とイスラエル軍は、パレスチナへの「抑圧」を相当強めている事を感じています。

私のほうから、「ガザ地区」の様子、特にパレスチナとエジプト国境の状況を動画を用いて説明。映像の専門家の前で、見せるのも恥ずかしいのですが、誠実なハイサム氏は興味深く見聞きしてくれました。

その後、村の中にある「Freedom & Justice」の事務所に立ち寄り、イスラエル軍がビリン村で用いる、催涙弾、プラスチック弾、大音響爆弾などの実物の説明をしていただきました。最後に、見せてくれたのが、子銃弾を含んだ銃弾（ダムダム弾）です。体内に撃ち込まれた銃弾がさらに子銃弾に分かれて体内で拡散する・・・・・時には子銃弾が肝臓や腎臓などの内部臓器まで達するとのこと・・・・そういえば、ガザのシーファー病院の整形外科病棟を回診していた時、この銃弾で左下腿を受傷した患者さんを診ました。開放骨折となり、子銃弾がレントゲンで明確に見ることができました。

「車いすのラニー」に住まいの前で、ばったりラニー氏に遭遇・・・・右上腹部に、低温火傷を負っていました。胸髄損傷の彼は腹部の知覚がなく、長時間温熱に当たると火傷となるのです。

その後、奥様に、サランラップを用いた「湿潤療法」を説明しました。１年前の訪問時に、お湯で足に熱傷を負った子供が連れてこられました。その時、井上さんがきれいに「湿潤療法」で処置したのです。その後の経過を聞くと「完治」とのことでしたが・・・・２週間前に私達のところに来ていたそうです・・・・・・気付くことができず残念でした！！！

さらに、奥から左環指の指尖損傷の男性が来て・・・・診てほしい・・・・ＯＫ・・・・これも「水道水で洗浄して、ラッピング・・・・」つまり「湿潤療法」をお願いしておきました。

そうしているうちに、午前中の礼拝が終わり、12 時前からどこからともなく

ビリン村：イスラエル兵に撃ちこまれる催涙弾（毒ガス）

「平和デモ」参加者が集まりだしました。地元の青年達はもとより、テルアビブから来たイスラエルの青年、いつもお会いするイスラエルの精神科医、女性・男性を合わせて 40 人位で「平和デモ」の出発でした。ここで、感じることは、イスラエル人の中にも『占領』に反対する人々が確実にいるのだということです。イスラエルの占領政策をなくすためには、イスラエルの国そのものを変えなくてはなりません。その「核」となるのがこのような人々ではないでしょうか。「昨年会ったじゃないか」と握手を交わすイスラエル人もいました。ユダヤもイスラムもお互いに認め合う、宗教の多様性を認め合う・・・・・このことが今後のパレスチナ問題の解決の大切な側面になると思うのです。

一方、けが人の発生を予期して赤新月社（赤十字社のイスラム版）の救急車も配置されています。「今日は、日本から整形外科医が来てくれているよ」とハイサム氏からの紹介がありました。

そうしているうちに、イスラエル軍が私達のほうへ、「進軍」を開始・・・・先ずは、催涙弾で「攻撃」を開始してきました。辺りは、少しずつ催涙ガスのにおいが立ち込めていました・・・・・。こうして、今日の「平和デモ」が展開して行くのでした。

10 月 2 日以降、ヨルダン川西岸と東エルサレムにおける、イスラエルによるパレスチナ人への抑圧が強まる一方です。それがじわじわパレスチナ人社会の中に鬱積し、それが爆発する・・・・・爆発させる・・・・・パレスチナ人に回復不可能な打撃を与える・・・そうしたシナリオがすでに出来上がっているかのような気がしてなりません。

V　ヘブロンの現実

本日は、現在のパレスチナ、ヨルダン川西岸で最も緊張の強いヘブロン行きの日です。

現地ではどの人に聞いても「危険だから気をつけて・・・！！」と親切な忠告を受ける地域です。ここは、そもそもユ

ダヤの中でも最も極右的過激さを持っての「入植者」がパレスチナ人を差別・抑圧してくる土地なのです。

訪問の目的は、毎年の「定点観察」を行い状況の変化を観察すること、もうひとつは、そこの活動家の腰痛・坐骨神経痛の診療なのです。

バスを乗り継いで、ヘブロン市内へ・・・中心街は人出がいっぱいです。早速、イスラエル軍と「入植者」占領されているシュハダ通りへ入ろうとして、マッソン検問所へ・・・。

パスポートを提示するも検問所の通過を許可されず、イスラエル兵に引き返しを指示されました。それを見ていたパレスチナの老人が大きな声で何かを叫び、検問所の中に入ってきました。3 人の軍人はその老人にマシンガンを向けています。その成り行きを見ていたパレスチナ人がその周りに続々集まってきました。

「一触即発」の雰囲気とはこのこと・・・私達は、「イスラエル軍の発砲が始まる」と叫んで足早にその場を退去しました。

私は、パレスチナ人とイスラエル軍の衝突がこのようなことがきっかけで始まるのだということを初めて自分の肌で感じたのです。

1）荒れ果てるシュハダ通り

そのため私達は、逆からシュハダ通りへ・・・・イブウヒーム・モスク脇の検問所をぬけ、２ケ所の軍人チェックを受けてたあと、通りをゆっくり歩きながら状態をチエックしました。

昨年よりも「荒涼感」が進んでいるとともに各所でのイスラエル軍による監視の強化が進んでいました。建物の屋上からも、塀の陰からも、公園の木の後ろからも、じっと私たちの動きを監視しているのです。きっとこのほかに『監視カメラ』も稼働しているのものと思われます。

ヘブロン市：シュハダ通り

2）Youth Against Settlement(YAS) の活動とイッサ・アムロ氏

目指すは、「入植地」に反対して強力な活動を展開している「Youth Against Settlement」(YAS) の事務所です。ここは、入植者とその家族が、すぐ隣のパレスチナ人の土地に入りこみ、家を建て公園を造り、そこでピクニックまがいのことを毎日行っているのです。もちろんイスラエル軍に守られてです。

何かの抗議デモしょうものなら、大人でも子供でもただちに逮捕・拘留です。昨日の YAS のリーダーのイッサ氏がイスラエル軍に逮捕され、５時間もの間、後ろ手に縛られ、体を便器に固定されて拷問を受けてきたとの報告を受けました。私の診察では、明らかな外傷はありませんでしたが、長時間、体と四肢を縛られた状態により右上肢痛と強い左の坐骨神経痛を呈していました。

事務所内で、診察している間にも「入植者」の居座りが続き、イスラエル兵からの嫌がらせが続いています。兵士の中

イスラエル兵に守られる入植者の昼食会

侵入する「入植者」と戦う

には、「昨日は、5時間だったが、今度は、10時間の逮捕・拘留・拷問にしてほしいのか」などと口汚い暴言をはく者もいます。

こうした状況の中にもデンマークなど欧州から若い女性のボランティアの参加があります。様々な事務作業やＩＴを駆使しての広報部門を担っています。

エルサレムに戻るに当たり、心の底から「Youth Against Settlement」(YAS) を支える活動を日本からも発信すべきではと考えました。帰国後、「奉仕団」のメンバーと相談しなければなりません。

昼食後、エルサレムへの帰途につきました。私達の利用した乗り合いタクシーの運転手さんは、Human Rights Defebders Group のメンバーで、帰り道に若干のガイド役まで行ってくれました。

Flying Check Point といわれる、あるときイスラエル軍が臨時に検問所をつくり、通る車の「検問」を始めることがあります。あるいは、何かの事故や『事件』で交通の渋滞が起きます。帰りの乗り合いタクシーが、その渋滞に遭遇しました。運転手さんが迂回道路へまわろうとし反対車線に入り、対向車と言葉を交わしている時・・・・その時、車の前に若いイスラエル兵が立ちはだかり、マシンガンを水平状態に構え「カチ、カチ」と安全装置を外して銃口を我々に向けてきました。この間 10 ～ 15 秒間・・・・生まれて初めて銃口を向けられました。カメラのシャッターを押すこともできず･･･。

しかし、こうしたことがパレスチナの人々は、日常的に行われている事を思うと、ふつふつと心の底から怒りがわいてくるのを抑えることはできませんでした。

その後、ベツレヘム検問所を通る前後に、催涙ガス＝毒ガスと汚物の悪臭が強くなりました。目がチカチカ、皮膚がヒリヒリとかゆみ、舌先がピリピリ、喉がイライラ・・・・この近くで、パレスチナ人が、イスラエル軍の攻撃・武力弾圧を受けている証拠なのです。

これらの症状は、９時間後でも続いているのです。パレスチナの住民がこの中で生活を余儀なくされている現状を考えると、住民の健康への心配とそれを破壊するイスラエルへの怒りがここでもとめることができませんでした。

Ⅵ　ジェリコ・アクバドジャベル難民キャンプでの診療

４人で、アクバドジャベル難民キャンプでの診療のために、ジェリコへ移動しました。

エルサレムからは、23km の距離でしかありませんが、その間に検問所もありパレスチナ人にとっては、決して近い距離ではないのです。

ジェリコは、私達「パレスチナ医療奉仕団」がパレスチナでの活動を始めた原点の地なのです。

ジェリコは温暖で、エルサレムやガザと比べて、比較的「穏やかな」地域なので、ここに来ると内心「ほっと」するのが実際です。

噴水を囲む市中心部には、お店が並び、市役所がパレスチナの旗を風になびかせています。

ジェリコは、キリスト教の巡礼をする方々が多いので、12 月の今は、クリスマスツリーも飾り始めています。その中に、パレスチナ国旗の飾られたツリーもあり、住民の仲のよさ？を感じさせました。

また、ジェリコは世界最古の都市でもあります。市内には、1 万年前に、ジェリコ市が誕生したという、エンスルタン遺跡もあります。また、死海の近くにあり、海抜マイナス 250 mにあり、12 月でも温暖で、緑の多い町なのです。

宿舎から市中心部までの道すがら、アクバドジャベル難民キャンプ診療所の敷地内に、大きなリハビリセンター（？）の建設が進んでいました。２～３年前から構想されていた「リハビリセンター」がいよいよ完成するかも知れません。

夜に、Ahmed Jubeh 所長と電話で連絡が取れ、いよいよ準備が整いました！！！

翌日４人は、宿舎からリュックを担いで徒歩で 20 分・・・・1 年ぶりの診療

ジェリコ市：診療所の向かえにある女子、小・中学校

ベドウィン集落での無料検診

所です。

すでに、３階建ての新診療所の建設が進んでいます。これには、私達が望んでいたリハビリ部門も開設されるとのこと・・・・パレスチナ難民キャンプの医療水準向上と運動器疾患への理解のあらわれではないでしょうか。UNRWA 医療局長清田先生の考えが強く影響しているのでは、と考えました。

私達をパレスチナ医療支援に最初に導きいれてくれたのが、当時診療所長であった Jubeh 先生でした。以降 2011 年から訪問を続けてきました。今回、すでに Jubeh 先生は、現役を退き UNRWA の管理部門に移っていました。が、代わりにいたのが若い Maher 医師でした。初対面にもかかわらず、日本からの医療チームに対して大変快く対応してくれるとともに、これからの難民医療にかかわってゆく「人材」の様な気がしました。日本でもそうであるように、UNRWA で働く医師たちにも後継者問題が大切な課題なのです。

腰痛・膝痛などの患者さんを診察しているとJubeh先生が現れました。案の上、いつもと変わらぬ快活さを感じさせることに安心の一言でした。

来年３月に完成する診療所には、リハビリ部門が完成することが明言されました。と、言うことは、ジェリコを中心に、ヨルダン渓谷に広がるパレスチナ難民の健康管理に大きな意味を持つことになるのです。来年の第８次医療支援活動でも、再度ジェリコでの活動を決意いたしました。

その後、いつものように、診療所の前にある難民キャンプの女子小学校へ・・・・・・ここは、８学年 800 人の女子小学生が学んでいるところです。

授業中でしたが、校長先生と懇談・・・・と、４名の生徒が、私達への「歓迎のスピーチを読み上げてくれました。今回で、６回目となる訪問の「持続性」が、校長先生に私達に対する安心感と信頼感を持っていただけたもかもしれません。

ここでも「活動の持続性」が、パレスチナ人の皆様に受け入れてもらえる最低条件ではないかと思うのです。私達の「医療支援活動」は、１年に１回の取り組みでしかなく、当初はこうした信頼関係への自信は十分ではありませんでした。しかし、今回の取り組みで、初歩的ではありますが、そうした自信が芽生えつつあるのです。

勿論、高校教師の齋藤育さんと井上看護師さんがグランドに出て来た小学生たちと交流する姿を見ていると、子どもたちへは生活の確立を前提に「医療と教育」の二本柱が大切なことをこの難民キャンプでも大切なことを再認識させられるのでした。

たった、１泊２日のジェリコでの活動でしたが、次回を期して１万年の歴史を誇るジェリコを後にしました。

Ⅶ　砂漠の遊牧民、ベドウイン集落での無料検診

ベドウイン集落への無料検診は、今年で２回目になります。昨年パレスチナを国家承認しているスエーデンの大使一行と一緒になったところです。それは、国道１号線に沿った WADI Jose(ピーナツの意？) にあるベドウイン集落です。

赤ちゃんから大人まで、８人ほどの検診と一人ひとりに運動療法を指導・・・・その中に昨年診察していた軽い脳性マヒの男の子（７歳）も検診に来ました。幸い昨年より歩行状態が安定していました、両親にさらなるリハビリをお願いしました・・・・来年の再診も約束して・・・・。

ここには、札幌から持参した薬と軟膏類を届けました。

というのは・・・・・ベドウインとは、「砂漠の遊牧民」です。アラビア半島を移動しながら羊や山羊を飼育し生活を送っている人たちです。イスラエルの「入植政策」は、彼らが遊牧しながら移動する土地を「入植地」と道路建設で分断してしまいます。つまり、生活の基盤と糧を根こそぎ奪われているのです。それに反対するとパレスチナ人と同様に、弾圧が待っています。

また、「パレスチナ難民」ではなく、難民としての様々な「権利」が保障されません。従って、テントまがいの移動小屋での生活を送りますが、そのほとんどは、極貧の生活を余儀なくされています。ここに、私達が「無料検診」を行う理由があるのです。

夕闇が近づいてきたころ、ベドウイン集落での検診活動を終え、来年の検診の約束をしてエルサレムへと向かいました。

あ～、やっと無事に「第６次医療支援活動」を無事に終えることができた・・・・言葉にならないほど熱いものが胸に込み上げながら、明日からの活動に向けて、同行した白山さん、井上さんと固い握手を交わし、地道な活動を労いました。

其れにもまして、こうした私達の活動を支えてくれている「医療奉仕団」のメンバーと支援を寄せてくれる皆様に心からの感謝する気持ちが心の中に拡がってくるのでした。

■ GAZA 地区

Ⅰ GAZA 地区への「入国」

1）イスラエルのよる「封鎖」と「侵攻」に苦しむ・・・・『ガザ地区』へ・・・

2016 年 11 月 30 日：昨日、旧市街で一人、今日は西エルサレムの近くで一人、イスラエル兵に射殺されたという情報が入り、緊張してホステルを出発・・・案の定、旧市街のダマスカス門では、20 人ぐらいのイスラエル兵と治安警察が無表情でパレスチナ市民を監視、それだけでなく、通行中の障害者や老人、屋台の青年など手当たり次第に「尋問」を行っていました。エルサレムの緊張に髪を引かれそうになりながら、朝 9:00 に白山さん、昨日合流した井上さんとの三人で、ガザ地区へ向かいました。

日本人の看護師さんが「ガザ地区」に入り医療活動に参加するなんて、まだ聞いたことがありません。井上さんは、「この貴重な経験をしっかり実践する」という気持ちを何度も語ってくれました。

「ガザ地区」への唯一の出入り口である北部エレツへ向かいました。途中から左右の景色は、野菜畑が広がっていました。

世界一厳しいといわれる「エレツ検問所」へ到着、実際の旅券審査は、比較的容易でトラブルもなく通過しました。しかし、マシンガンをぶら下げた『入植者＝民兵』が人を見下すような態度で私達を監視、指示する異様さは変わりませんでした。金網に囲まれた約 2 km の通路を通り、パレスチナの「入国」手続きを行い、２度目のガザの地を踏みました。

また、イスラエルと「ガザ地区」の境界にはおよそ 30m 上空に、イスラエルが大きなバルーンを設置し、空から「ガザ地区」内を監視しているのでした。

ガザ北部：エレツ検問所

UNRWA のガザ地区本部を経由して、今回私達が診療を行うリマールクリニックで、エブラム医師、エリーナ医師そして 2 年ぶりに再会したジャミール院長とこれからの相談を行い、また「運動療法教室」を開催するリハビリ部門へも挨拶に行きました。

2014 年 7 月に、札幌まで講演に来てくれたガザ在住のマカドマ先生に 2 年ぶりに再会することができました。

2）ガザ地区の「風景」

ガソリン不足のため、ラバに引かれる「馬車」があちこちに見られました。2014 年の「ガザ侵攻」の後の道路工事も市内のいたる所で行われています。現地のお話では、「ガザ侵攻」により破壊されたインフラ再建は大幅に遅れているとのことです。停電も続き、地域別に８時間ごとの停電・通電が続いています。夜は、徒歩での外出は困難ですが、車で走るとそのヘッドライだけが異様に光るのです。歩行者も引かれそうになりますが・・・・そこは、車と無言の合図を取りながら器用に「共存」しているのです。

市内では、銃撃を受けた後が生々しい壁をむき出しにする建物、イスラエルによる「侵攻」の時、家族が別々に安全な場所に寝る、必要なものは身から離さず、すぐ持参して避難できる態勢でいることなど、当時の生々しい現状を聞き取りました。

６～７年に及ぶ「ガザ地区」の封鎖は、物質的にも、人的にもその発展を阻害し続けてきました。現在の失業率は、50％以上との説明をうけ、愕然としました。たとえ大学を出ても仕事がない、「将来への夢」を描けない、今でも週に１～２回は、イスラエルの空爆を受けている・・・

こうした状況もとで、患者さんの診療と「集団運動療法教室」の開催のほか、病院はどのように運営しているのか、病人、障害者は・・・、住民の生活は・・・、子どもの心の傷は・・・、「侵攻」からの復興は如何に・・・、などをつぶさに視察し、医療関係者はもとよりガザの住民との交流を深め、次回の支援活動の課題整理も大切な取り組みでした。

3）ガザの生活

ガザは、若者の比率が高い（18 歳以下が 40%）のですが、街を見ていると豊かそうな青年たちに会うこともあります。（もちろんそうでない人が圧倒的ですが・・・・。）イスラエルの「封鎖」政策の下で、一部の「富裕層」と圧倒的な『貧困層』の階層分化ができています。

200 万人の人口中、120 万人の難民を抱えていますが、『富裕層』とは以前からガザに住んでいたパレスチナ人の中から出てくるのです。

夕闇が迫るとたちまち全体が暗くなってきます。「ガザ侵攻」で発電所が爆撃・破壊され、ガソリンも不足しているため発電能力の極度な低下を強いられているからです。病院などは、必要最低限で自家発電を行い、診療を維持します。しかし、一般家庭は 8 時間の通電可能時間でも必要な照明で生活をします。トイレを借りても電気がつかず、自分でスマホの明かりを頼りにしなければなりません。学生たちも自宅では、簡易電灯か携帯電話の明かりを頼りにせざるを得ないのです。

街中では、車と同時に馬車がゆっくり人や荷物を運んでいます。「封鎖」によるガソリン不足は、時代を一気に 50 年以上も後回させています。

宿舎の裏は、ガザ港に面しており、港の様子がよく見ることができます。小さなボートにパレスチナ国旗をなびかせて漁に出ます。しかし、海岸から 3 海里（約 5.5km）の地点では、イスラエル海軍が海上封鎖しているためそれに近づくと砲撃を受けることになるのです。夜になると沿岸にイスラエルの監視船の明かりが見えてくるのです。以前は、資源豊富な地中海で豊かな漁業を営み、ガザの特産物となったのです。こうしたことも「ガザ封鎖」で、漁業の壊滅を画策するイスラエルのやり方です。

さらに深刻なのは、水と農業の問題です。これらは、私達が課題に挙げている健康破壊に直結するものでもあります。ガザ地区の水は、地下水をくみ上げるのですが、その水自体が年々減少し、イスラエル側から入ってくる水は化学物資に汚染されているのです。その汚染された水で生産される農作物にもその毒性が持ち込まれ、人体への悪影響が指摘されているのです。

イスラエルは、「ガザ侵攻」の時にも陸路を直接戦車で進軍してくる時も、農家の畑に化学物質を垂れ流してきます。それがまた、農地の汚染を深刻化させるのです。

ベイトハヌーン難民キャンプ

そのほか私達にはにわかに信じがたいのですが、イスラエルから「輸入」される花の香り、果物、砂糖などあらゆるものに「食品汚染」が拡大しているのです。

事実、近年ガザ地区では、新生児に先天性心疾患、先天性形成異常が増加している事が報告されているのです。イスラエルが使用する劣化ウラン弾、DIME 弾など放射性物質の関与も明らかになる可能性があります。（アメリカとイスラエルは、イラクとガザをその実験場？にしてるかのようです）

日本でこうした問題が明らかになれば、政治的にも一大事です。しかし、占領者気分のイスラエルにとって、抑圧対象のパレスチナ住民の健康は眼中にないのです。だって、「侵攻」で平気で子ども、老人などの一般市民を「虐殺」してゆくのですから・・・・・。

イスラエルによる農地汚染

II　2014 年イスラエル軍侵攻の傷跡

1）ベイトハヌーン難民キャンプ

12 月 1 日、ベイトハヌーン難民キャンプへ入りました。ここは、昨年のイスラエルによる「侵攻」で最も激しい破壊と殺戮が行われたところです。復興が進んでいるものの、いまだ破壊のままの姿が残されています。その寒風が吹きぬける家の中で生活を余儀なくされている御家族を訪問しました。

その中で、UNRWA 医療局長の清田明宏先生が著した「戦争しか知らない子供たち」という本の表紙に出ているイマールさんの自宅を訪問することができました。

現在も壁に穴があき、窓にもガラスもなく、寒風が入り雨水がしみ込んでいる「破壊家屋」です。そこに、11 人の家族が肩を寄せ合って暮らしているのですから、その困難さは容易に想像できます。

イマールさんと話をして・・・

私：「将来の夢は？」・・・

イマールさん：「一生懸命勉強して、医師になり産科の先生になりたいの」と語っていました。

この困難の中で、諦めずに「夢」「希望」を持って前を向いているこの 16 才の少女の言葉と行動に、私の胸に熱いものが広がってくるのを感じました。そして、思わず、この子の力になりたい・・・・「頑張れ、イマール」と心の中で叫んでいるのでした。

さらに後日、もう一度ベイトハヌーン難民キャンプへ・・・・前日見逃したところへ車を向けました。それは、ひどい

状態でした。

キャンプ内の大きな損傷を受けたYouth Clubのビルの屋上からあたりを見ると、仮設住宅が肩を寄せ合っていました。屋根にはビニールシートを置いて雨を防ぎます。トタン屋根のため、夏は暑く、冬は寒い・・・本当の仮設・簡易住宅です。ここには、実に4,300人のパレスチナ人が身を寄せ合っているのです。それを見ているうちに、思わず、今年5月に行った東北の被災地の仮設住宅を思い出しました。

もう午後6:00時です・・・・・・イスラエルによる「ガザ封鎖」により、エネルギーと電力不足にあえぐ「ガザ地区」は、すでに真っ暗です。1日8時間の通電がある地域は、暗い街灯が点灯しますがその他の地域は、自家発電以外は、車の暗めのヘッドライトさえも異様に明るく感じさせるのです。

真っ赤な沈む夕陽が、何かしらパレスチナ人と私達に対して、「明日は・・・未来は、明るいぞ！！！」と叫んでいるかの様でした・・・・・・。

2）シャザイヤ難民キャンプ（Oldest GAZA）

その後、昨年9月の「侵攻」で、はげしい攻撃を受けたシャザイヤ地区へ・・・・ここは、ガザ地区の発祥地でoldest GAZAともいわれているのです。

イスラエルとの「国境」に近付くにつれ、破壊された家屋、壁に銃弾の跡が生々しく残る家屋、完全に爆破されて更地にされた土地などが次々に目に飛び込みます。更に「国境」近くに向かうとイスラエル軍のタンクとブルトーザーで破壊された、工場群がありました。イスラエル軍は、殺戮と同時に産業基盤も破壊して、パレスチナ人が生きて行くための「経済基盤」そのものも破壊することを目的としていたのです。

これらを写真に収めようとシャッターを切り続けていると、ところどころにハマスの監視所があるため即座にカメラを隠さなければなりませんでした。

そうです・・・・ここは、イスラエルとガザ地区の「国境」なのですからそれは厳しいものがあります。

ガザを取り囲んでいる「国境」まで3～4kmの距離・・・・そこまで畑が続き、望遠レンズの中にイスラエル側が見えてきます、その上空には、気球船があげられそこからもパレスチナ人は、監視され続けるのです。それだけではありません、「国境」から2km圏内へ入ると、イスラエルからの攻撃が待っているのです。自分たちの土地にもかかわらず、こんな危険にされていること自体許すことができません。その現場に自分の足で立つと、頭の中にある「国際的不正義」という理念が現実のものになって迫ってくるのです。2014年の「侵攻」で、この地域では3,000人が住宅を失くし、30人の子供を含む100人の住民が殺戮されました。

3）ハンユニス難民キャンプ東ザンナ地区

もうひとつは、難民キャンプのあるハンユニスの東にあるザンナ地区です。ここに行くために途中で道を聞いたムハンマドさんが、親切に案内してくれました。外から来た人間に対して、同行までしてくれる・・・・・パレスチナ人の優しさを感じながら、この地区を回りました。

ここでは、昨年の「侵攻」時、イスラエル側からメインストリートを戦車で進軍してきたのです。戦車により、陸路＝農地を直接来るのですから、地区に入るや否や「水平打ち」攻撃されました。ほとんどの家が砲撃と銃弾の攻撃を受けた後が生々しく残っていました。中には、今でもテント暮らしをしている家族に会うこともありました。

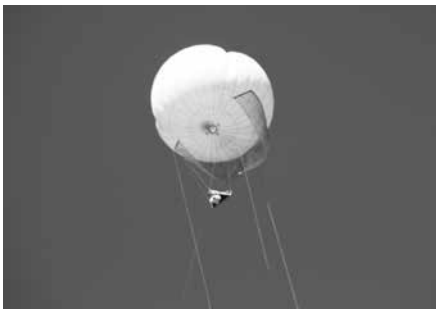
ここは、イスラエルとの「国境」まで、数百メートルでした。こちらからは、イスラエルの監視塔がはっきり見える距離です。こちら側からそれらが見えますが、イスラエル側からは、家の陰で見えないとのことでしたが・・・・・・「安全第一」を優先させ帰路に着いたのです。間もなく、夕闇があたりを支配してきました・・・・・・そして、車が海岸に達した時、地中海へ沈もうとする夕陽が私達を迎えてくれたのです。

4）ガザ空港の跡で・・・

向かったのは、破壊されたガザ空港周辺地域です。空港は、2001年にイスラエルの空爆で破壊され現在も使用不可能な状態で放置されているのです。今では、一面野草に覆われていました。当時の空港ビルだけがさみしそうに私達を見ているかのようでした。平和であれば、きっと利用客で賑わっているのだろうと想像が頭の中に浮かんできました。

この地域には、砂漠の遊牧民であるベドウイン族が多く、今までは羊やラクダの遊牧で生計を立てているのです。そこに、いきなりの「侵攻」が開始され、270名が「虐殺」されました。

しかし、問題なのは、イスラエルとの「国境」まで、わずか1,5km前後にあるのです。ここからは、イスラエルが揚げている「監視風船」がかなり大きく見えるのです。これ以上の接近は、危険との判断で、Uターンし次の「国境」へ向かいました。安全が第一なのですから・・・・



イスラエルの国境の監視バルーン

5）南部ラファ市東マッシュルーム地区＝暗黒の金曜日＝
＜ブラック・フライディ（暗黒の金曜日）の街、東ラファのマッシュルーム地区へ・・・・・・・＞

2014年8月1日は、金曜日でした。イスラムの金曜日は祈りの日です。が、その朝、午前8時にイスラエル軍が突然この地区へ、空と地上から総攻撃を加えました。たった1時間の「侵攻」で70名を虐殺し、125名の負傷者を出しました。この街へ入るといまだ、破壊された建物が散在し、特に多くの家の壁には

痛々しい銃弾や大砲弾の跡が残されていました。ある住民が、イスラエルのロケット弾の破片まで見せてくれました。

6）ガザ・エジプト国境ラファ地区へ・・・破壊される地下トンネル

ガザ～エジプト国境の町、ラファへ・・・・・・破壊と汚染を強いられるガザの土地・・・・・・・

リマールクリニックでの午前中の外来を終了し、昼食もそこそこに、国境の町、ラファへ向かいました。ガザの海岸＝地中海を右手にして車を走らせること約 40 分、ラファへ入りました。

ラファは、昨年のイスラエルの侵攻で最も破壊と殺戮の激しかった地域のひとつです。エジプトと国境を接し、地下には 2,000 本ものトンネルがあり、イスラエルの「封鎖」の中で大切な物流拠点でした。そこを狙ってイスラエルは、空と地上から猛攻撃をかけてきたのです。

最初に訪れたのは、30 床程度の地元の NGO クエート病院でした。

昨年、イスラエル侵略の時にスタッフの犠牲者を出しながら診療を続け奮闘した病院です（18 頁詳細）。

ここを後にして、いよいよ国境へと向かいます。中心街を抜けるとすぐに、海岸用の砂地が現れます。ここがガザとエジプトの国境で、目の前に迫ってきました。

「国境」での警備が厳しいとこはここでも例外どころか、ハマス政権下の厳重な管理統制が敷かれていました。

つぶされたトンネルの出入り口があちこちに散在し、掘りだされた砂がうず高く積まれています。小高い場所に上がると、100 位先に国境線を示すバラ線と石造りの塀がつながっていました。

こちら側にハマスの警備兵、エジプト側にエジプトの歩哨兵が立って、それぞれを監視し合っています。まさに、ここは、「国境」の最前線なのです。

国境を見ている私達のところに、ハマス兵がやってきて、事務所へ案内されました。ドキドキしていると、「ここは危険なので、案内するということでした」・・・・

陥没した地下トンネル

危険なことの理由は二つ・・・

① トンネルが潰されたので、地面のあちこちが陥没しているのです。不用意に歩くと陥没する穴に落ちてしまうこと。

② エジプト兵が急に銃撃してくることがある。

ということでした。

国境の塀に沿って車と徒歩で、ハマス兵の解説付きでこのあたりを観察できたのでした。

「侵攻」後、エジプトがすべてのトンネルに海水を流し込み、トンネルを破壊し、ガザ唯一の流通拠点を壊滅させ、イスラエルの『封鎖』政策を『支援』いるのです。

エジプト兵が遠くの監視塔から「見守る」中で、私達への監視が続きます・・・・・

地下トンネルへの海水注入により、トンネルが圧壊し、地面の陥没が始まり、今もこれからもそれが続くのです。また、注入された海水がさらに地下水を汚染し、農産物への汚染を深刻化させてゆきます。

エジプト国境

トンネルの海水による破壊は、単にトンネルを閉鎖するだけでなく、深刻な環境汚染と人体への悪影響が進むのです。

イスラエルとエジプトは、ガザ地区でこのような「緩慢な殺人」に手を染めているのではないでしょうか。「侵攻」による「激しい殺戮」と環境汚染による「緩慢な殺人」・・・・これが、イスラエルがこれからも狙う「ガザ地区破壊政策」の両輪なのだと思いました。

化学物質・放射線物質、そして・・・・今度は「海水」・・・・・こうしたことで苦しめられるガザ地区の住民を一日も早く解放するために、この実態をより多くの人々に知っていただき、イスラエルの「封鎖政策」をやめさせる・・・・「Stop occupation!!!」の実現に一歩でも前に進みたいという気持ちが心の奥底からフツフツと湧いてくるのでした。

国境のエジプト側に沈む夕陽を背にして、日が暮れ、闇深くなるガザ市への帰りを急ぎました。

追記・・・・西岸では、イスラエル兵・・・ガザ地区では、ハマス兵に会いますが、双方の兵士の目を見ていると・・・ハマス兵の目の優しさを感じます。パレスチナ人を家畜の様に扱い「侵略」と「不正義」をおこなうイスラエルへの目は、恐ろしいですが虚ろで覇気を感じません。

大して、「侵略と封鎖」「抑圧と不正義」に立ち向かうハマス兵の目は、眼光は鋭いのですが、優しさと笑みを含んでいるのです・・・ガザ地区とエジプト国境での感想でした。

Ⅲ　診療活動（別表参照）

1）リマールクリニック

12 月 1 日からいよいよガザ地区のリマールクリニックで診療を開始しました。・・・・主に腰痛と膝痛の患者さんが 15 人程度。中には、クリニックの先生や検査技師もいました。

診察・診断の後、井上さんと療養指導をしながら、必要な患者さんには、12 月 6 日に予定している「運動療養教室」（腰痛教室）への出席を促しながら診療を勧めました。

アラビア語～英語の通訳は、クリニックの研修医がお手伝いをしてくれました、感謝です。

今回の患者さんのほとんどは、女性です。街中を歩いても肥満の男性は、西岸より少ないようです。その理由を聞くと、「ガザは、パンよりもお米を食べることと高価なオリーブ油の使用が少ないのかも」と教えてくれました。

翌日もリマールクリニックでの診療が続きます。

ここは、家庭医療チームによる主治医制で、医師が直接患者さんを連れて診察・相談にやってきます。

腰痛や膝痛が多く、疲労に起因する肩こりもあります。ちなみに、日本での「有訴率」でも肩こり、腰痛が上位にあり、ここ「ガザ地区」も似ているのかも知れません、また、戦争と「封鎖」による心理的な抑圧も見逃せません。

かねてより日本在住のパレスチナ人の方から依頼されていた「先天性側弯症」の女子が受診しました。高度な先天性側弯症で、手術治療が必要かもしれないほどなのです・・・・帰国後、関連方面と相談することにしました。

今日も研修のムハンマド医師と女医のアベール医師に援助をいただいて、診療を進めました。ともに優秀だけでなく、患者さんのお話を優しいまなざしで聴きだしているのが印象的でした。

2）腰痛体操の普及・・・・運動療法の DVD 作製へ・・・・

本日は、今年のガザ地区での医療活動の最終日。今年のガザでの大きな目標の一歩が、「ガザ地区で運動療法を！！」でした。

肥満や糖尿病・高血圧の多いこの地域に運動療法の意義と実践を図り、それを住民の中に拡大することの第一歩になることを目的としました。

運動療法の最初として、「腰痛学校」（low back school）を開き、集団で実際に体操を行いながら覚えていただくことにしました。しかし、イスラム社会の在り方として『男女別』の原則？がありますので、実技は同じことを男女にそれぞれ示すことになりました。

男性 5 人、女性 6 人が参加し、私の挨拶と運動の意義の説明の後、井上さんが実技説明し、白山さんがモデルとなってを基本的なことだけを覚えてもらいました。

ジャミール院長始め、リハビリスタッフの協力で、笑顔の中で「腰痛学校」を終えることができました。当初、心配していた女性の参加もよく、『男女別』の原則さえ守れば、むしろ女性のほうが積極的かもしれません。終了後の質問も女性優位？でした。

今後、運動種目なども検討し、リマールクリニックに要約したパンフを作成し（アラビア語でも）、次回のガザ行までの間を保証したいと考えています。

3）ガザ地区最大のシーファー病院へ

今日は、ガザ地区で最大の医療機関であるシーファー病院へ・・・・ここは、イスラエルによる「ガザ侵攻」のたびごとに大勢の外傷患者さんを受け入れ、その治療のために壮絶な診療を展開するところです。これまでの施設は既に 40 年以上経過して老朽化のため、新築工事中です。しかし、新築といってもすべてのドアだけは、中古品を使用しています。イスラエルの「ガザ封鎖政策」により、資材が十分入手できないからです。

昨年の「ガザ侵攻」の結果、古い施設

ガザ市リマールクリニック　診療結果

疾　患	総数62名(48.4才)	男性 18名(51.6)	女性 34名(40.4)
腰痛・腰椎疾患	31名(53.2)	19名(55.1)	12名(51.8)
頸椎疾患	4名(44.9)	2名(51.5)	2名(38.0)
脊柱側弯症	2名(17.0)	1名(18.0)	1名(16.0)
肩関節周囲炎	8名(50.3)	1名(27.0)	7名(53.6)
変形性膝関節症	6名(57.3)	1名(62.0)	5名(56.4)
関節リュウマチ	3名(60.0)	0名	3名(60.0)
外傷	6名(26.9)	3名(18.8)	3名(50.0)
その他	2名(49.0)	1名(83.0)	1名(15.0)
	患者総数（平均年齢）		

は被害が大きく、先日も天井が落下し、その下に入院いていた母子が危うく命を落とすところでした。もちろん、外来も混雑し、外科系・内科系、それぞれのER（救急部）では、若手医師たちの声が飛び交っていました（もちろん、アラビア語です）。

さて、800床規模のシーファー病院には、医師が700人在籍しています。ここでも若手医師が圧倒的ですが、全医師の60%は、無給で働いているのです。医師の数か月単位の交代制で押し寄せてくる診療を維持しているとのことでした。院内で会うどの医師からも「well come ＝ようこそ・・・」の声がかかり、身内の感じを強く感じさせました。

整形外科・外傷部門責任者のブルシュ先生（ルーマニア・ブカレスト大学出身）がやってきて、院内の案内と整形外科病棟の回診に誘われました。そこに行くと、ノウルエーからの２名の整形外科医師と１名の理学療法士に会いました。彼らは、NORWACという個人参加からなる医療支援NGO組織から来ており、同行している井上さん、白山さんともすぐに打ち解ける・・・・「ガザ医療支援」という共通の目的をもつもの同士は、国境を越えて心が通い合うことをつくづく感じました。

彼らとも一緒に回診療し、下肢の銃創をうけた若い患者さんもいましたが、レントゲンをみるとその弾丸は、子弾薬を詰め込んで、体内でさらに子弾薬が飛び散るという、イスラエル軍と兵器産業が「開発」した、新型弾丸＝ダムダム弾だったのです。イスラエルは、「兵器」の開発の実験場としてパレスチナを位置づけているのです。

ブルシュ先生は、精力的に院内の案内を続けてくれました。

ギブス室では、いまだ石膏のギブスを使用しています。日本では30年前から使用せず、現在はプラスティクギブスなのですが「封鎖」による資材不足は、こうしたところにも出ています。

手術室は、６室ありますがフル回転状態でした。予防衣を着用し、すべての手術をのぞいていると手術中の医師・看護師たちから、ここでも「well come ！！！」のサインが出てくるのでした。

４）イスラエルの侵攻時、住民を救ったクエート病院

エジプト国境近くのラファにあるNGOクエート病院は、30床程度の小さな病院です。前庭には、2014年イスラエルの侵攻とそれによる死傷者とそれを診療した職員たちの姿をパネルにしていました。これは、犠牲者と75人の職員と９名（＋パート医５名）の医師たちの奮闘の記録でした。

この地域の人口は280,000人ですが、他の２病院も入れて75人から53人まで減少し、大変な苦戦を強いられているのです。

医師たちの懇談で、医師の月給が実は500ドル（約６万円）の低賃金で地域の医療活動に携わっている事を告白してくれました。

その他、民間NGO病院であるALWADA病院やVascular and rehabilitation病院、赤新月社病院などを視察しまた。

５）ハマス政権・保健省での懇談

前回に続き、今回で２度目の訪問ですが、前回面会した保健省大臣は、昨年の「侵攻」の時にイスラエルにより殺害されたのでした。

今回保健省前では、ガザ地区のメディアからインタビューを受けることになりました。日本から来た「北海道パレスチナ医療奉仕団」を紹介し、訪問の目的とガザ地区の印象をお話ししました。

その後、保健省大臣のヨシフ・リーシュ医師とシファー病院院長のアッバス医師がガザの地区の医療状況を詳しく、丁寧に説明してくれました。

印象に残ったことは、

①イスラエルの「封鎖」により人も物も出入りできず、特にがん患者さんが治療できずにいること（＝治療できずに死亡すること）、建築物の老朽化と破壊によるインフラの悪化が進んでいる事（環境衛生の悪化が進行する）、

②悪性腫瘍の発生が増加している事、特にイスラエルが使用する劣化ウラン、DIME弾がその原因かもしれず、検討していること。

③小児の心臓奇や様々な先天異常が増加している事

④イスラエルの「侵攻」のときには、がん患者や慢性疾患の患者さんをに他の病院に移ってもらい、外傷患者さんの治療を優先せざるを得なく、それらの患者さんに「医療中断」というしわ寄せが行く

⑤小児整形外科の医師が全くいない事態です。多くの子供が出産されますがその中にいる脳性麻痺や先天異常、先天性股関節脱臼などを見ることができずにいるのです。

ガザには、多くの若者がいます。現在200万人となったガザ地区の人口の中で、18歳以下の若者が実に40%を占めているのがガザの人口構成です。

社会の高齢化に悩む日本とは逆に、未来に向かって進むことができる「力を蓄えている最中なのです。

知性豊かなパレスチナ人と彼らは、戦後の日本の復興を例に出して、私たちから何かを学ぼうとする姿勢に満ちています。「イスラエルの封鎖」が廃止され、イスラエルによるパレスチナへの抑圧が解除される時には、パレスチナの発展をこのガザ地区がけん引する可能性が十分あると思います。

これからパレスチナの解放を願うだけでなく、ともに取り組むこと・・・・・・・その日が来た時には、嬉し涙を流して、その喜びを分かち合いたいと思うのでした。

「第６次パレスチナ・ガザ医療支援活動」報告

イッサ氏は腰痛をかかえながら、イスラエル軍と戦っています　事務局　白山 晴雄

１、はじめに

医療活動支援は年に一回で、「約一月間の支援活動滞在」が通例になっています。

若い諸君にも何とか、ご参加いただくのが一番重要です。今回は、その意味ではとても重要な支援活動といえます。というのは、看護師の井上智美さんと養護教員の齋藤育さんの若いお二人が参加してくれたからです。看護師の井上さんはこの活動（当団のパレスチナの医療支援）がきっかけになって、新しく JICA の海外駐在派遣の看護師スタッフに採用されて、今年の 10 月から、アフリカへの医療活動に、二年間、赴任することになりました。齋藤さんは JICA の活動で、既に、ヨルダンの難民キャンプに、2 年近く障害者教育にも携わっていたので、アラビア語が堪能でした。共に二人とも優秀な若者です。

これからも、パレスチナ支援のために、一人でも多くの若者が私たちの「医療奉仕団」に参加してくれることを願っています。

＜写真説明＞
聖書の中に出てくる観光地「魅惑の山」の食堂で（ジェリコ市）楽しいひと時です。左が齋藤育さん、右が井上智美さん

２、医療支援の「難民キャンプ」の状況について

「パレスチナ西岸地区」と「ガザ地区」の医療支援状況については、猫塚団長の方で「専門的なご報告」があると思いますので、私は、今までに支援に入った「西岸地区の個々の難民キャンプとそのほかの支援先」について、概略の説明をしたいと、考えます。

その前に、私たちがお世話になっている UNRWA(国連の一機関) についてご説明をいたします。

＜ＵＮＲＷＡって何だろう？＞

UNRWA とは、国際連合パレスチナ難民救済事業機関（英語で : United Nations Relief and Works Agency for Palestine Refugees in the Near East）のことです。

＜その歴史的経過は？＞

イスラエルがパレスチナ人の住んでいた土地に、圧倒的な武力で、一方的に、イスラエル建国をしたのが 1948 年でした。この時、イスラエルの武力による土地奪いの結果、約 70 万～ 80 万人のパレスチナ人が土地を奪われて、緊急避難をせざるを得なくなりました。このことをパレスチナ人は「ナクバ」(＝アラビア語で「大崩落」の意味) と呼んでいます。その翌年の 1949 年に UNRWA は設立されました。国連機関で、ワン・イッシュで設立されている機関はＵＮＲＷＡだけであり、設立から 70 年近く経った今も、その問題解決は一向に、見えないのも現状です。

<UNRWA の活動の内容は？＞

「パレスチナ難民とは、1946 年 6 月 1 日から 1948 年 5 月 15 日の間にパレスチナに住んでおり、その家と生計を失った者とその子孫であること」と定義される。難民キャンプはガザ地区、ヨルダン川西岸地区、ヨルダン、レバノン、シリアの３ヶ国、２地域にまたがって、現在全部で 58 ヶ所で、その救済の対象者は、約 500 万人になる。活動の分野は、教育、保健、福祉、仕事、救急などの援助および人間開発を行う国際連合の事業機関である。

＜私たち「医療奉仕団」と UNRWA とどのように繋がったか？＞

2012 年年末に、ちょうどジェリコの近くにある「アクバドジャベル難民キャンプ」の支援活動時に、UNRWA の保険局長をしている清田先生から FaceBook で猫塚先生に連絡が入り、その日のうちに面談して、それ以来意気投合し、現在にいたっているのです。現在私たち「医療奉仕団」が医療支援に入っている難民キャンプの紹介をします。

＜ヨルダン川西岸地区の支援している難民キャンプ＞

①クバドジャベル難民キャンプ (ジェリコ市の南西方向の郊外にある)

私たちが難民キャンプの支援を始めた一番最初の場所です。右も左もわからずに手探りでスタートしました。当時の診療所の責任者であったジュベ先生のお人柄が受け入れてくれました。設立は 1967 年で、面積的には西岸のキャンプでは、一番広いようです。
人口は 2 万人が住んでいて、自然環境的には、非常に厳しいようです。夏は 40 度を超える日もあり、私たちはいつも 11 月以降に訪問しますが、それでも、日中は、T-シャツ 1 枚で過ごせます。洪水もあり、キャンプの失業問題も抱えています。

②シュファット難民キャンプ (エルサレム郊外の北部地区にある)

③ビリーン村 (ラマラ市の西にある) の平和デモ支援活動

ビリーン村は西岸地区の中央の西側にあって、イスラエルの壁の境に位置しています。イスラエルの壁は全長 700Km 以上の長さで、囲まれている。パレスチナ側からすると非常に厄介な代物です。全ての交通が遮断されてしまうからです。問題はイスラエル側が、パレスチナ

この診療所（シュファット RC）
の責任者はサリーム先生です。

1965 年に設立され 1967 年に、オールドシティーの Mu'askarCamp を追い出された 500 世帯が住み始め、それ以来常にイスラエルの敵対的なターゲエトにされてきた。
特に 2003 年からは、東エルサレムの家屋破壊がひどくなって、難民じゃないパレスチナ市民が、逃げ場を失って、シュファットに逃げ込んでいる。当初、1 万 3 千人の人口が、今では 2 万 5 千人以上に膨れ上がって、最悪の人口過密状態を余儀なくされています。

人の占領地の側に食い込んで壁を作るので , 畑や町や親戚もすべて , イスラエルの都合で , 分断されてしまうのです。ビリーン村も同様で ,1947 年に確定されたいわゆる「グリーン・ライン」を破る形で、ビリーン村側に大きく食い込んで , 土地を奪ってくるのです。この不当なイスラエルの侵略に抵抗して , もう 10 年近く , この小さな村の「インターナショナル平和デモ運動」が継続されています。毎週金曜日 , 村のモスクで礼拝を終えた後 , イスラエル人の平和活動家や外国の抗議者たちと村人で , 奪われた壁に向かって , 行進をします。始まる前から IDF(イスラエルの国の軍隊のこと) が , すでにスタンバイしていて , すぐに「催涙ガス弾など」を打ち込んできます。その催涙ガスがどれほど強烈かは、十分に知っているので、私たちはすぐに引き上げます。年に一人くらいが殺される激しい攻撃もあるので、それなりに緊張します。

ここには , 二人の友人の活動家がいます。一人は , いつもデモの中心にいて、占領軍の暴力を記録しているハイサム氏。もう一人は 2000 年にインティファーダーで , 占領軍に狙撃されて、脊髄損傷の怪我を被りながら、車椅子でデモ参加のラニ氏です。最近は、辱創がひどいので、いつも猫塚団長が、健康状態を診断し、薬品を提供している。

青い煙は強烈な催涙ガス弾です。昔より強力に作られているのか、最近のは、煙が来なくても、皮膚の痛み、呼吸困難、目の痛みなど、ひどい症状を感じます。イスラエルは、このような武器使用で、武器の性能確認をして、ノウハウを検討してるでしょう。

④ブロンの反入植地運動のイッサさんの支援活動

ヘブロンの状況はとても複雑で、僕の手に負えそうにもないので、エリック・アザン著『占領ノート』から、少々長いけれど、一部引用（P106 ～ 107）させてもらうことにしよう。

ヘブロンは二つの区画に分割されている。H1 地区 (18 平方 Km で住民が 10 万人) は曖昧ながらパレスチナが統治しており、H 2 地区 (5 平方 Km で 3 万人の住民と 400 人の入植者) は完全にイスラエルの支配下にある。分割の経緯については色々耳にしたが、大体次のようにまとめることができると思う。パレスチナで現在起きている多くの災禍と同様、ヘブロンでも、問題はオスロ合意 (1993 年) から始まった。

オスロ合意では、領土を三段階に区別することになっていたことを思い起こそう。A 地区はパレスチナ自治区、C 地区は全面的に占領軍が統治する地域、B 地区はその間である。ヘブロン合意に基づき、町は一部が A 地区に、別の一部が C 地区に分割された。

1994 年のラマダーン（断食月のこと）のときに、「族長たちの墓」（があるモスク＝イスラム教の教会）でアメリカ人の入植者の医師バルーフ・ゴールドシュタインが 29 人のパレスチナ人信者を虐殺した事件はヘブロン版 9・11 である。(引用はここまで)

そんなわけで、パレスチナの中でも、「過激な入植者とその警備のイスラエルの国軍の駐留が大勢で、いつも暴力事件が絶えない厳しい地区」がヘブロンです。その地区の代表的な活動家がアムロ・イッサさんです。いつも暴力を振るう入植者や国軍と対峙しているが、イッサ氏は持病の腰痛とも戦っているので、いつも猫塚団長が診察を行っています。それが「奉仕団の支援」です。

＜ガザ地区の支援している難民キャンプ＞

ガザ地区はご存知の通り南北に長く , 縦 40Km, 横 7km の長方形。周囲は完全にイスラエルによって , 包囲され , 猫の子一匹抜け出せない状態です。と , いうのも北のエレッツ検問所 (CP=Crossing points の略) も , 南のラファ CP(エジプト側) も完全にコントロールされています。ボーダーの上には , バルーンに固定された高性能監視カメラで 24H のコントロール・ルーム監視。最近は、軍事攻撃用ロボット搭載の自動運転システム車が 24 時間監視を始めた , とのニュースモあります。欧米系マスコミの大好きな「イスラム教原理組織＝ハマスが実効支配している」の枕詞も、ガザ地区の狭いエリアだけなのです。

さて、次にガザの基礎データをチェック。人口は約 180 万人ですが , 平均年齢は 18 歳と非常に若い地域です。面積は 360 平方 Km なので , 人口密度は 5,000 以上 / 1 Km と、超過密です。そんなところに空爆するイスラエルの行為はまさに、国際法違反。『天井のない刑務所』と呼ばれています。しかもインフラは最悪で , 飲料水 , 電気 , ごみ処理など多くの問題を抱えたまま国際社会から放置されたままです。また、地中海に面していますが , イスラエルが海上沖で軍艦を停泊させて、海岸から 5 Km 以上離れて , 操業すると , 逮捕されるか , 撃ち殺されることになります。まさに命がけの仕事です。以前日本が協力して、空港を作りましたが、すぐに破壊されて、今は使用されていません。したがって , 陸、海、空ともに閉鎖状況です。

北海道パレスチナ医療奉仕団「第６次医療支援活動」報告

彼女は 16 歳で戦争を３回経験しています・・　看護師　井上 智美

11 月 28 日から約３週間、私にとって２回目となるパレスチナ医療支援活動に参加させてもらいましたので、簡単ですが報告させていただきます。

ガザ

今回は UNRWA の清田先生、服部さんの協力もあって、情勢の厳しいガザにも行くことができました。

ガザでは市内で一番大きいリマールクリニックで診療を行いました。患者層は 40 ～ 50 代の女性が中心で、腰痛、膝痛、肩痛、頚痛を主訴とする方が多く、これは昨年のシュファットでの患者層と同様でした。

一人ひとりにあった診察、処方、運動指導を行い、また今回ガザでの大きな目的の一つであった腰痛体操のクラスに患者さんに参加してもらうべく声かけを行い、クラス当日は男女各５、６名が参加してくれました。リハビリ室の一部を借り、柔軟体操から筋力増強体操まで約 15 分で、白山さんがモデルとなり猫塚先生が各人の指導、私が全体的な説明…と未熟なクラスではありましたが、参加者全員が笑顔で満足されたような印象をうけることができました。今回初めてこのような参加型の企画を行い、患者さんの意欲や関心を垣間見ることができたので、このような企画は今後も継続していくことが重要な事だと思いました。

ガザのクリニックは午前中で診療が終わるので、午後からは元 UNRWA のマカドマ医師の案内のもと、様々な病院、クリニックへ訪問しガザ市内の医療の厳しさの現状を聞いたり、院内の設備をみせてもらったりしました。諸外国からいろいろな形で援助を受け、少しずつ発展しているとはいえ、日本の設備が当たり前に感じている自分にとってガザ市内の医療機器やシステムはまだまだ古いものも多く、少しでも多くの患者さんの命を救うためにはもっと援助が必要になってくると感じさせられました。

戦争しか知らないこどもたち

また病院訪問のほかにも、一昨年夏のガザ侵攻による爪痕が多く残る地域へも伺うことができました。中でも清田先生が昨年出版した、「戦争しか知らないこどもたち」にでてくるイマンさんのお宅へ訪問させてもらいました。彼女は 16 歳で戦争を３回も経験しています。

一昨年夏のことを「ただただ走って逃げるしかなかった」「家は壊れたけど命は助かった」と話してくれました。

彼女の家族は両親、兄弟９人の 11 人で今でも破壊された家に住んでいます。私たちが訪問した日は雨で夕方だったため、とても寒くまた停電の最中で真っ暗。彼女は明日試験があるから、携帯電話の灯りで教科書を読んでいました。これが侵攻されたガザ地区の実態なのです。

無数の侵攻の跡

またほかの地区でも壁やドアの扉、屋根に至るまで無数の銃弾の穴が残っていました。今でも残る無数の侵攻の跡がガザの深刻な状況を物語っていました。

今回のガザ訪問の際に、ずっと閉鎖されていたエジプト側のラファ国境が２日間だけ開けられました。次はいつ開くかもわからない国境で、エジプトでずっと待機していた人々が無数におり、やっとの思いでこの機会に札幌から帰国したリームさんにも会うことができました。私たちも同日にたまたまこの国境にハマスの先導の元で訪問していたという経緯もあり、何か必然的な偶然を感じました。

西岸地区

ガザに１週間滞在したあとは西岸地区に移動し、シュファットとジェリコで診療活動を行いました。シュファットでは私たちが訪問する前週にイスラエル軍による侵攻がありました。発端は昨年のパレスチナ人の自動車による自爆テロ？の制裁という名目で、すでに射殺された彼の家族をも処罰するべく家の破壊、またシュファット RC 内へ圧力をかけるための攻撃でした。私たちがワークショップを行った幼稚園にも銃弾の跡が無数にあり、その間の園児たちの恐怖を考えると言葉が出てきませんでした。

その幼稚園でのワークショップは斎藤

さんによる手遊び、歌、工作で、年齢別にクラスされた子供たちみな積極的に楽しんで参加してくれました。何よりも幼稚園の先生たちが喜んでいる姿が印象的でした。ほかの施設でも実施してほしいという声もあり、このワークショップの需要の大きさを実感し、また今後もつなげていければいいのではないかと思いました。

また、シュファット診療所では診療の傍ら待っている患者さんや子供たちに手形を象った鳩を作ってもらい、メッセージを残すという展示活動も行いました。最初は恥ずかしがったり拒否する子供もいましたが、ほかの子が作っている姿を見て興味がわいて作り始めたり、ずっと描いていたい、帰りたくないという子供もいて、こちらの活動も大変有意義なものとして残すことができました。

同じ家族に会うことができました。

また今年も昨年と同様のベドウィン集落へ訪問することができ、同じ家族に会うことができました。昨年あった子供たちが１年で大きく成長しており、また新しい家族も誕生していました。昨年診た足に障害をもつ少年の診察も行い、歩き方や走り方、成長度合いを観察し適切な指導をすることで継続した支援の有意義さを実感することができました。来年も同じ家族を訪問して成長を観察できれば、と思いました。

今回のパレスチナ支援活動はガザ訪問、腰痛体操の開催と、子供たちへのワークショップ、という去年はできなかった新しい活動がありましたが、どれも有意義なものだったと思います。ぜひ来年にもつなげていければいいなと思いました。

私にとって２回目のパレスチナ訪問でしたが、どの瞬間どの出来事もとても貴重な経験でした。ぜひこの経験を多くの方たちに知っていただけるよう、伝達活動を継続していきたいと思います。

「第６ 次パレスチナ医療支援活動」報告

かたや一般人、かたや難民として生活するパレスチナ人　教員　齋藤 育

１．北海道パレスチナ医療奉仕団との出会い

私は、平成 25 年７月から平成 27 年３月まで青年海外協力隊の隊員として、ヨルダンにあるジェラシュキャンプ（別名ガザキャンプ）で障害児支援に関する活動を行っていました。約２年間パレスチナ難民の同僚や友達、子ども達と一緒の時間を過ごし、帰国後にもパレスチナ難民支援を続けていきたいという気持ちが日に日に強くなりました。そして、帰国して間もなく、当団体の団長である猫塚先生と出会い、今回の第６回パレスチナ医療支援に参加する流れとなりました。

２．初めてのイスラエルへ

第６回パレスチナ医療支援活動には 12 月５日（土）から 12 月 15 日（火）まで（ヨルダン経由含む）16 日間の日程で参加しました。

12 月６日（水）にヨルダンより、キングフセイン橋、イスラエルのアレンビ橋を渡り、イスラエルへ入国する流れとなりました。ヨルダンの出国審査場からイスラエルの入国審査場を越えるまで、この間約３時間。とても重苦しい雰囲気のイスラエル側の入国審査場で様々な質問をされ、やっとイスラエルへ入国することができました。入国できたときには安堵の気持ちでいっぱいでした。

初めて私の目に映るイスラエルは、５m から 10m おきには必ずいる銃を持った警官か軍人がうろうろとしているエルサレム。これまで、10 数カ国を旅したことがありましたが、こんなにたくさんの銃を持った人を見るのは初めてでした。そして、それと同時に驚いたことは、エルサレムのアラブ人地区側はアラビア語がメインとなっており、また、町の雰囲気や店の作りなども私がこれまで見てきたアラブの国そのものという雰囲気で、少しほっとしました。

３．初めてのパレスチナへ

イスラエル入国の翌日、12 月７日（月）に初めてパレスチナの町を訪問しました。初めて訪問した町は、死海の近く、海抜マイナス 260m にあるアリーハー（ジェリコ）という町でした。町は静かで穏やかな雰囲気で、パレスチナの国旗が至るところではためいていました。もちろん、エルサレムのように銃を持った警察や軍人などうろうろしていません。

そして、ここで驚いたことは、パレスチナの中にあるパレスチナ難民キャンプ。同じ国籍の人達が、かたや一般人として、そして、かたや難民として生活しているのです。

本来の生活の場を奪われ、難民となり、自分の地域を追われ、そして、さらには難民である状態から抜け出すために自分の国を離れ、海外にまで生活の場を替えていかなくてはいけないというパレスチナ難民の現状を知り、心が痛くなりました。

３．子どもワークショップの開催

12 月 10 日（木）に東エルサレムにあるシャファーット難民キャンプのチャリタブルセンター内にある幼稚園で遊びのワークショップをしました。

ワークショップの前の園長先生との打ち合わせの中で、衝撃的な話を聞くことになります。なんと、12 月２日（水）にあったイスラエル軍による侵攻の中で、この幼稚園に対しても敷地内に侵入し、銃撃をしてきたとのことでした。子ども達の恐怖、子ども達を守ろうと必死だった先生達の気持ちを思うと本当にやりきれない気持ちでいっぱいになりました。そして、園長先生はこう続けました。「傷ついた子ども達のためにこのようなワークショップを開いてくれてありがとう。そして、ここにいる子ども達には心を豊かにするための活動が必要だ。」と。ここにくるまでにも、傷ついた子ども達のためにという気持ちで準備を進めてきましたが、実際に現場を見て、現状を知

り、園長先生の言葉を聞き、さらなる使命感を持って、活動することができました。

ワークショップは３歳時から５歳時までの園児を対象に行い、アラビア語での手遊び歌、紙皿を使った魚の工作と、釣り遊びをしました。現地の先生達の協力を得ながら、無事、活動を終えることができました。

今回出会った子ども達の笑顔がいつまでも耐えることなく、そして、大人になっても笑っていられる国、世界になっていくことを本当に心から願います。そして、これからも子ども達を笑顔にしていくことのできる活動を続けていきたいと言う気持ちが更に強くなりました。

４．ビリン村平和行進に参加して

12 月 11 日（金）にパレスチナにあるビリン村へ、毎週金曜日に行われている平和行進を見学しに行きました。ここビリン村は、イスラエルの首都テルアビブとパレスチナの行政機関が集中しているラマッラーとの間にあります。

平和行進では、パレスチナ側から参加者でポスターを持って行進をはじめ、一部の男性陣はパレスチナの旗を身にまとい、ガスマスクを身に付け、石を飛ばすための紐と布でできた武器なような物を持っています。それに対し、イスラエル側はスポンジ弾や催涙弾を所持した軍隊で待ち受けています。いかなる場所でも

パレスチナ側の人間はイスラエル側に簡単に入ることができませんが、イスラエル側の人間はぐんぐんとパレスチナ側に侵攻してきます。そして、パレスチナ側が少しずつイスラエルへ近付いていくと、いよいよ催涙弾が発射されました。私は遠く離れたところからの見学でしたが、目や鼻に痛みを感じました。この痛みをこの地域に住んでいる人達は毎週感じているのです。また、イスラエルによる攻撃で負傷者が出ることもあります。

いずれにせよ、この危険な平和行進をする必要がなく、また、この地域に住む人達が安全に、平和に生活できる日が一日でも早く来ることを願います。

５．平和を願う壁画の作成

12 月 12 日（土）に東エルサレムにあるシャファーット難民キャンプの UNRWA が運営する診療所において、平和を願う壁画の作成をしました。

猫塚先生が診療活動をしている傍ら、診療所を訪れている方々の協力を得て、診療所の壁を平和の象徴である鳩をモチーフにした手形で装飾しました。多くの方々に興味を持ってもらうことができ、小さな子どもから大人までたくさんの手形を集めることができました。子どもだけでなく、大人達も楽しそうに製作活動に取り組んでおり、手形の中のデザインやメッセージにはたくさんの時間を掛けて考えていました。最後には、日本からの平和のメッセージと合わせて診療所の入口のドアや壁を装飾しました。この作品を見て、少しでも診療所に来た人々の心が癒やされること、そして、遠く日本からもパレスチナを応援していることを忘れないでいて欲しいと思います。

６．さいごに

第６回パレスチナ医療支援に参加し、イスラエルの中のパレスチナ、パレスチナの中のパレスチナ難民キャンプを回り、その間、めまぐるしく様々な感情が沸き起こりました。そして、この先もパレスチナと関わり続けていきたいという気持ちが更に沸きました。自分に何ができるか、パレスチナ支援をする際に何が必要であるか考えながら、これからも北海道パレスチナ医療奉仕団のメンバーとして活動していきたいと思います。

出発前に日本からのメッセージを
みなさん書いていただきました。

「第７次ガザ医療支援活動」報告

イスラエル人の中にも「占領反対」を掲げている人々がいます　団長　猫塚義夫

＜目　　的＞
　１）　作成中の「腰痛体操 DVD」を持参に、現地の医師・理学療法士に説明、現場からの批評を意見交換。
　２）　ガザの医療と生活・「復興」実態の視察。
　３）　病院・診療所での医療コンサルタント。
＜メンバー＞
　猫塚義夫（団長・整形外科医）、白山晴雄（事務局・社会活動家）
＜行　程＞
　2016 年４月８日～４月 17 日
　2016 年４月 10 日～ 15 日　　ガザ地区での活動
　2016 年４月 16 日　エルサレム　旧市街地定点観察と「反占領デモ」参加

Ⅰ）３回目の「ガザ地区」へ
　１）ガザ「入国」・・・『封鎖』によるひどい環境汚染
　２）ガザの夜は「暗黒」
Ⅱ）診療活動
　１）外来診療と北海道新聞の同行取材
　２）ベイトハヌーン難民キャンプへの訪問とイマンさん
Ⅲ）「腰痛体操」DVD での意見交換と診療
　１）リマールクリニック（４月 12 日）
　２）ハンユニス診療所とクエート病院での意見交換と診療（４月 13 日）
　３）ハンユニス診療所での診療後、ガザ地区南部・ラファのクエート病院へ・・・
　４）ラファ検問所へ（４月 13 日）
Ⅳ）ガザ地区『女性団体』を訪問（４月 14 日）
Ⅴ）ガザ地区での活動の最終日（４月 15 日）
Ⅵ）エルサレム旧市街「定点観察」（４月 16 日）
　１）エルサレム旧市街の中でも賑いの多い、ダマスカス門へ・・・
　２）旧市街の中に入り、オーストリアンホスピス前の三叉路・・・
Ⅶ）イスラエルの占領政策に反対するイスラエル市民

Ⅰ）３回目の「ガザ地区」へ

４月 10 日いよいよガザ地区へ「入国」の日です。

「ガザ地区」北部にあるエレツ検問所より、白山さん、宇佐美裕次さん（道新記者）との３人とも無事通過することができました。

１）ガザ「入国」・・・『封鎖』によるひどい環境汚染

約 1.5Km に及ぶ『金網廊下』で荷物を担ぎ・転がしながらゆっくり徒歩で・・・・

今回は、まず生活排水の悪臭がひどい・・・ガザ地区は、燃料不足のため浄水装置を稼働できず、この悪臭の原因となっているのです。これによる水質・土壌汚染が健康に悪影響を及ぼす生活環境の悪化が心配です。

通路のフェンスのすぐ近くで、がれきのコンクリートを破砕し、不足している復興のための建築資材に転用する若者たちがいました。ここでも、イスラエルによる『完全封鎖』の実態を見ることができるのです。同時に、ここではいつでもイスラエル軍の発砲がありうる状態であることを思うと、このような作業が、いわば「命がけ」であること、そしてそれは、イスラエルのジェノサイド政策によるものであることを考えながら歩くと、胸が締め付けられる思いに駆られるのでした。

イスラエル側のゲートは、マシンガンをぶら下げた入植者の監視下でありましたが、ガザ側のゲートは、人でにぎわい、生活感の溢れているのが印象的でした。

最初に訪れた UNRWA のガザ地区本部。庭からは、隣にあるイスラム大学の建物と尖塔が美しく私達を迎えてくれているようでした。

責任者の本部長のガータ先生、精神衛生の責任者のデビット医師とこれからのスケジュールを打ち合わせ、その後「ガザ地区」の精神衛生について意見交換を行いました。

特に、イスラエルによる３度の「侵攻」による子供たちのメンタルヘルスについての報告がありました。私達が検討している「ガザの子供たちへの支援」のあり方について、現地の目線で取り組まなければならない事を再確認できました。

２）ガザの夜は「暗黒」

夕刻には、マカドマ先生とともに、ガザの夜の街へ・・・・それは、GAZA in the DARK という言葉通りの暗黒のガザ状態でした。現在は、ガザ市すべてが１日４時間しか通電がありません。（ガザ地区「暗黒の夜」https://www.youtube.com/watch?v=6jkVoG1E1Ls）

これは、８年以上も続いている、イスラエルによる「完全封鎖」のため燃料・エネルギーに不足をきたしているためな

のです。車のヘッドライトのみが異様に明るすぎる状態です。体験的には、ちょうど停電下の街を車で走る様なものと想像するとよくわかります。そして、真っ暗なガザ港へ行くと、少なからずの若者たちが私達の周りに寄ってきて「記念写真」を一枚・・・・何と、ガザの若者たちの人懐こい事でしょう・・・・。

夜のガザ港で：地元の若者たち

II）診療活動

4月11日は、ガザ市内にあるUNRWAが運営するリマールクリニックへ「出勤」。

1）外来診療と北海道新聞の同行取材

Jamil院長はじめ、看護師さん、理学療法士さんたちと再会を喜び合い診療活動へ入りました。

北海道新聞の宇佐美記者も同行し私達の活動の様子の現地取材が行われていました。

16名の患者さんの中には、現地の医師2名とのサッカーの元ガザ地区代表の選手も含まれています。

医師のひとりは小児科の先生で、シャザイヤ難民キャンプで、小児科の診療と乳幼児の栄養に関する診療をしています。重度の腰部椎間板ヘルニアのため安静を薦めましたが、「医師不足」「超多忙」のため断念・・・・10月の再会を約束して、できるだけの安静に妥協せざるをえませんでした。ガザ地区の医師たちの業務の大変さを実感させられました。

それに比べて、腰痛を訴える元サッカー代表選手は、運動療法に取り組むという治療方針に前向きに取り組むことになりました・・・・・少し、安心・・・・

診療後、「奉仕団」が作成した「腰痛体操」のDVDについて宇佐美さんがJamil院長に聞き取り取材をいしてくれました。すでに鑑賞を済ませていたJamil院長から、いい内容だと講評をうけ、「この内容を院内で広め、それを各家庭内でDVDを見ながら体操を進めるようにしたい」という意見が出されました。（詳しくは、明日DVDと腰痛の集団療法に関する会議が設定されています）

難民の肥満解消にDVD

安価な食料 栄養偏りがちなガザ

道パレスチナ医療奉仕団

ガザの診療所でパレスチナ人女性を診察する猫塚義夫さん（右）＝宇佐美裕次撮影

【パレスチナ自治区ガザ宇佐美裕次】道内の医療関係者有志でつくる「北海道パレスチナ医療奉仕団」（札幌）が現地で、パレスチナ難民の肥満対策をしようと運動療法の普及に取り組んでいる。運動療法を紹介する医療従事者向けのDVDを作製し、パレスチナ自治区ガザに入って関係者に配布し始めた。ガザはイスラエルの境界封鎖が続き十分な診療が受けられないことから、奉仕団に対する期待は大きい。

「ストレッチで膝の筋肉を鍛えれば痛みは解消します」。国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）がガザで運営するリマール診療所で、奉仕団長で札幌市の整形外科医、猫塚義夫さん（68）が診察後、患者に運動療法を教えた。膝痛で診察を受けに来たラシミャ・シャエルさん（58）は「今まで手術を勧められていたが、怖くて断っていた。この治療法を知って良かった」と喜んだ。

UNRWAによると難民の食料は、安価なパンなど栄養が炭水化物に偏りがちで肥満の人が多く、糖尿病などの生活習慣病が主な死亡原因を占める。2011年から毎年、自治区で医療支援に携わってきた奉仕団は、UNRWAから依頼を受けて、診療所の理学療法士らに運動療法を紹介する活動を続けてきた。

運動療法は、体の各部を効果的に動かすストレッチや筋力を強化する体操を取り入れた治療方法で、生活習慣病を起こす肥満の改善や予防に使われる。日本や欧米などでは一般的な治療だが、ガザでは普及していない。奉仕団は多くの医療従事者に手軽に学んでもらおうとアラビア語でDVDを作製。肥満や腰痛の改善に向け腰回りに筋肉をつける運動を説明する内容で、ガザにあるUNRWAの21診療所を中心に自治区のヨルダン川西岸の診療所でも配布する予定だ。

ガザは人や物資の出入りが厳しく制限されており、UNRWAのガダ・アルジャドバ医療責任者は「最新の医療知識を得にくいガザで、奉仕団のDVDは教材として大きな役割を果たす」と強調している。

猫塚さんは「運動療法は特別な機器を必要とせず、ガザの状況に適している。今後も新たな内容を盛り込んだDVDを作り、協力を続けたい」と話している。奉仕団は17日に帰国する。

北海道新聞

2）ベイトハヌーン難民キャンプへの訪問とイマンさん

昼から、GAZA地区北東部にある、ベイトハヌーン難民キャンプへ・・・・。

目的は、2014年のイスラエルによる「ガザ侵攻」で受けた被害の復興状況の視察と、清田先生が著した「ガザ戦争しか知らない子供たち」の表紙を飾っているイマンさん宅を訪問し、札幌の支援者から託された手作りの文房具を届けることでした。

イマンさんは、大変元気に学校に通い、将来の産婦人科の医師を目指して猛勉強中でした。しかし、同時に大変明るく、突然の訪問に対しても絶えぬ笑顔で私達を迎え、現状の困難と明日への夢を語ってくれました。

一方、イマンさんの父親と案内してくれた難民キャンプのUNRWA診療所所長から、イスラエルの侵攻の際、「核兵器の使用」の可能性があることの発言がありました。もし、そうだとすれば、ガザの住民にとっては、これまで言われていた「化学物質の汚染」とは、質的に異なる重大性をはらむことになります。今後、「放射能汚染」の有無と影響を考慮しながら活動を進める必要性を感じました。

中東で核兵器を所有しているのがイスラエルです。イスラエルの核戦略の基本は、核兵器の所有を「肯定も否定もしない」、いわゆるNCND政策なのですから油断なりません。

イマンさんの住宅の外観は、かなり整頓されてきましたが・・・・中に入ると

ベイトハヌーン RC：イマンさんと再会

砲弾の穴がそのままになっています。また、屋上でジャンプすると建物が揺れるという危険な住宅での生活を余儀なくされていいます。

現在の「復興」は、主に UNRWA とクエート、サウジアラビア、カタールなど湾岸諸国からの寄付に頼らざるを得ないのが現状です。イスラエルによる「封鎖」が続くガザ地区では、まだまだ復興に時間がかかるのです。

さて、私達が搭乗している UN マークのついた国連車の前に、自動小銃を手にしたハマスの兵士を乗せたトラックが走って行きます。それが子供たちの明るい笑い声が聞こえる「平和」な下校時であっても、やはりここ「ガザ地区」は、いつでもイスラエル軍の「侵攻」が行われる危険な状況に置かれている事を自覚されるのでした。「ガザ侵攻」の主導権は、いつもイスラルが握っているのですから・・・・。

破壊されたままのイマンさん宅

Ⅲ）「腰痛体操」DVD での意見交換と診療

本日の外来診療には、日本に留学経験のあるムハンマド医師が英語～アラビア語の通訳を買って出てくれました。

1）リマールクリニックでの討論（4月12日）

診療の後、今回のガザ行の最大の目的である「腰痛体操」の DVD に関する意見交換のためのミーティングが持たれました。

私達の他に、ガザＵＮＲＷＡ本部から医師２名、理学療法士１名、リマールクリニックから Jamil 院長を始め医師３名、理学療法士１名、ガザの地元報道関係者３名・・・で始まりました。

まず、私たちが持参した「腰痛体操」（13 分）の映像を供覧し、その後に DVD の意義と内容、活用などについて意見交換が行われました。

議論は、ときに白熱し院長の裁定が入ることもありました。総じて、DVD 作成など「腰痛体操」の体系化は、腰痛の改善のみならず、肥満を伴う生活習慣病への一環としての意味付けがなされました。（詳細は、別項で・・・）

こうして、実際にガザに入り、現地の人々と額を突き合わせて議論する中で、『現地ガザの目線』を一定程度獲得することができたような気がしています。まだまだ端緒についたばかりですが、これからも現地・パレスチナとガザの人々の目線と心に沿って『北海道パレスチナ医療奉仕団』の活動を継続・発展させたいと考えています。

こうした活動の展開は、UNRWA の清田明宏保健局長をはじめ、現地ガザの関係者の並々ならぬ協力があって可能となっています。

また、今回の「腰痛体操」への取り組みに、地元ガザ地区の新聞社からも取材を受けました。（又、UNRWA のホームページでも紹介されています）

この活動は、北海道とガザ地区で、それぞれの地元ネディアに同時に報道されるのかもしれません。

ミーティングの主な議論内容

（you tube で 記 録 https://youtu.be/sQQW4QiP9ck）

＜意義＞

＃運動療法の意義は、十分理解されていましたが、どのようにして持続可能性を持たせてゆくのか、が重要。

＃費用が安く、必要な医療器具もないことから、経済的困窮をきたしている難民医療にとって受け入れられや

意見交換

すい。また、グループ治療にも優れている。

UNRWA の関係で、疫学的に 400 名を調査したところ 20 ～ 34パーセントの患者さんに腰痛があった。

しかし、実際に受診するのは月に 10 人程度だ。20 年前から腰痛治療に関係しているが、なかなか前進しない。

UNRWA 関連以外にもターゲットを考えるべき。

#腰痛治療には、社会心理学的な検討も必要。

＜内容＞

#高齢者にもできるように、運動種目は、シンプルにしてほしい。また、運動種目の中に、等尺性運動を入れてほしい。

#一方、体操の中に腰椎を伸展させる種目も入れるべき

#運動療法に入る前に腰痛の原因について正確な診断が必要。

#すべての腰痛患者さんに共通する運動と個別の運動を組み合わせることが必要。

#高血圧・心疾患・糖尿病・骨粗しょうなどの危険因子を持つ患者さんに注意が必要。そのためには、理学療法士の監視下に行う方がいいのではないか。

＜今回の DVD について＞

#音声と映像のマッチングは、正しい。

#男女、それぞれの DVD を作るべき。

#女性の髪を隠してほしい。

さらに、DVD の中で提示してほしいこと。

#合併症（高血圧・心疾患・糖尿病・骨粗しょう症など）を持つ患者さんへの注意

#運動強度を軽いものからから徐々に高度なものに進めること。

2）ハンユニス診療所とクエート病院での意見交換と診療（4月 13 日）

昨夜の豪雨の影響が残る中、本日はガザ地区の中央部にあるガザ市内からハンユニス診療所へ・・・・。

ムハンマド所長の出迎えを受けて、早速院長室で「DVD」を供覧し意見交換を行いました。

所長のユニークなところは、「イスラム教徒の人が毎日 5 回行う礼拝後にするようにしてはいかがか・・・」との提案でした。しかも、実演付きで・・・私自身も初めて「礼拝」の仕方を教えていただきました。ここでも率直な意見が出され、次回にそれを取り入れて完成する「DVD」を持参することを約束しました。

その後、ここでも整形外科患者さんの診療が待たれていました。総計 12 人の患者さんでしたが、多くは腰痛患者さんです。中には、ここでも勤務している医師や術後の患者さんも診察することになりました。また、自分の受け持ち患者さんを直接連れてくる熱心な先生もいます・・・・・ガザ地区での運動器疾患医療の必要性を実感させられました。

ガザ市内から地中海を右に見て南下し、ハンユニスへ行く途中、デルバラ難民キャンプで酷い悪臭を経験しました。先日、ガザ「入国」時に、エレツ検問所で会った「悪臭」と同じです。ここらでも燃料不足による浄水設備の不稼働による環境の悪化が懸念されました。そして、いまだ裸足で遊びまわる子供たちや銃弾の跡が残る建物も散見されるのでした。

3）ハンユニス診療所での診療後、ガザ地区南部・ラファにある 30 床規模のクエート病院へ・・・

ここは、NGO による民間病院なのです。財政的に困難を抱えていますが、産婦人科を中心に医療活動を行っているのです。2014 年のイスラエルによる「ガザ侵攻」の時には、偶然の『無傷』に病院として多くの死傷者を診療した病院でもあります。

クエート病院

医局で「DVD」を供覧しての意見交換でした。特徴的なのは、「妊婦さん用の腰痛体操」の要望でした。帰国後、私の病院の西岡先生をはじめ、産婦人科の先生と相談して「DVD」に反映させる必要がありそうです。

ラファ（ガザとエジプトの国境）

4）ラファ検問所へ（4月 13 日）

https://youtu.be/wzMvtcbjFo0

その後、ガザ地区とエジプトをつなぐ「ラファ検問所」へと車を走らせました。昨年 12 月の訪問時にはガザ～エジプト国境へ行きましたが、ここ「Rafah Crossing Point」へ来るのは初めてでした。エジプトの現在のシシ政権は、イスラエルと「友好関係」を盾にここの閉鎖を続けているのです。

一日も早いガザ地区の解放のためにも、エジプトによる「Rafah Crossing Point」の開放を願ってやみません。

Ⅳ）ガザ地区『女性団体』を訪問（4月 14 日）

昨夜は、遅くにガザの女性団体のひとつを訪問・・・。ここでは、ガザの女性たちに、洋服や装飾品、ハンドクラフト、赤ちゃん用品・・・果ては豪華なベッドカバーを作り、生活のための収入を補う活動が行われています。近い将来、幼稚

女性グループと

園から学童保育も開設予定とのことでした。現在のガザの厳しい状態の中でも、女性たちの底知れぬ『強さ』を感じさせられました。

Ⅴ）ガザ地区での活動の最終日（4月15日）

午前中、12人ほどの患者さんの診察‥‥ムハンマド先生が自分の仕事（論文書き？）をしながらアラビア語～英語の通訳をしてくれました。時間の合間を見て、ガザ住民の健康状態も・・・。

すべての活動を終了後、ガザ地区UNRWAの医療責任者・ガータ医師をはじめ5人の幹部医師と「最終ミーティング」が持たれました。今回の活動の感想を述べ、「腰痛体操」DVDの内容と活用方法を議論しました。そして、お礼とともに、次回10～11月の再訪の予定を述べて、無事すべての予定を終了することができました。

リハビリ技師など病院の職員にお礼を述べながら、玄関に出るとそこには生活くささが蔓延するガザの街の喧騒が待っていました。昨年に比べるとロバの活躍が目立つような気がします。きっとガソリン不足で、自動車を動かすことができなくなってきた様です・・・・戦後、間もなくから1950年代まであった馬車・馬そりを想起させますが、イスラエルによる「ガザの完全封鎖」は、それほどの「苦境」と「歴史の逆転」をガザの住民に強いているのです。

その後、ガザ「出国」を目指し、一路北部のエレツ検問所へ・・・・今回もお世話してくれたＵＮマークのランドクルザーと運転手のオスマンさんへ感謝しながら・・・・

金網の隙間から遠くにあるイスラエルによる分離壁監視塔、そして空からは、高性能カメラを搭載した巨大バルーンが私達とガザ住民への監視を続けているのです。

今回もまた、延々と続く『金網通路』を歩きながら、イスラエルによる「ガザ地区完全封鎖への怒り」とガザの人々への「共感する心」を再確認するのでした。

それにしても、ガザの海岸で地中海に沈みゆく夕陽は、私の心の中に落ち着きと明日への希望を湧きださせてくれるのです。

Ⅵ）エルサレム旧市街「定点観察」（４月16日）

昨日、エルサレムに入り、本日は活動の合間にエルサレムの「定点観察」を実施・・・・。

この「定点観察」（自称）は、パレスチナ・ガザ地区におけるイスラエルによるパレスチナ人への「暴力と差別」「人権侵害」などの実態を経時的に把握するのに大変重要な活動なのです。

１）エルサレム旧市街の中でも賑いの多い、ダマスカス門へ・・・・

やはり、門の前と上からマシンガンを担いだイスラエル兵が行きかうパレスチナ人を威嚇的に睨みつけています。今回は、門の上部にある「のぞき穴」からも銃が見えるようにパレスチナ人を見下しているのでした。これは、初めてのことでした・・・・・。

門をくぐりぬけて旧市街を歩いていると、早速イスラエル兵によるパレスチナ青年への尋問に出くわしました。私は、反射的にビデオカメラを回してしまいました。: https://youtu.be/_P9Jia5Dd2I

不本意なパレスチナ青年のやりきれない気持が手に取るように感じました。

私達が、日常生活の中で突前、理不尽な尋問をうけ「何もないからあっちへ行け・・」などと警察や自衛隊員に指示される生活を想像することはできません。

しかし、ここパレスチナではそうした「理不尽な弾圧」がまさに「日常化」されているという現実がここにあるのです。

２）旧市街の中に入り、オーストリアンホスピス前の三叉路・・・・

ここは、その昔イエスキリストが十字架を背負って歩かされた道として、多くのキリスト教徒の方が訪れる事でも有名です・・・ここの前のカフェのテラスに席をとって「定点観察」です。

今までにも増して、多めのイスラエル兵がマシンガンを手にして、パレスチナ人を威嚇するのです。ここでもパレスチナの青年がイスラエルに両手をあげて尋問されていました。

Ⅶ）イスラエルの占領政策に反対するイスラエル市民

とはいっても、こうしたイスラエルからの理不尽な「構造的差別」に対して、イスラエル人の中にも『占領反対』を掲げて運動している人々もいるのです。決して多い数ではありませんが、本日も40名以上のイスラエル人がエルサレムのシェイクジャラ街に集まって様々な思いをパネルに仕立てて、スタンディングデモを繰り広げていました。毎週金曜日16:00～17:00までの定期開催とのことでした。私も白山さんも思わずパネルを手にとって一緒に並んで立って見ました‥‥彼らへの共感の意をこめて‥‥‥そして、一緒に頑張りましょうといいつつ、再会を約束してその場を後にしたのでした。

イスラエル人の「占領反対」デモ

「第７次 派遣活動報告」

少年であろうが、イスラエル兵の意思で全て軍法会議　事務局　白山 晴雄

１、はじめに (今回の活動目的について)

前回の医療活動《第６次派遣＝ 2015 年 11 月 19 日 (木) ～ 12 月 20 日 (日)》において、パレスチナ人の生活習慣病（肥満、食習慣、糖尿病、高血圧、運動不足等）による腰痛などについて、診断された。パレスチナの人々に、「腰痛体操 DVD」を作成し、運動療法を普及させることを、判断した。

帰国後、早速「腰痛体操 DVD」の作成に取り組んだ。作成後に、現地ガザの医療関係者から、この「腰痛体操 DVD」について、意見･感想などを聴取する旨、猫塚団長から表明された。例年のように、年に１回程度の支援訪問ではなく、今年は、「腰痛体操 DVD」のに対する見解を、ガザの医療関係者から、早急に受け取るため、４月に急遽、訪問の意向が決定された。そして、「第７次活動」に至った。

＜写真解説＞ガザ滞在の最終日に猫塚団長から、「医療奉仕団」が作成した「腰痛体操 DVD」(100 枚) について、プレゼンを行い、その後意見交換を行った。その結果、ビデオに対する評価は非常に高かった。この活動は早速 UNRWA のホームページで紹介された。(撮影：白山)

２、ヨルダン川西岸地区とガザ地区についての状況報告

毎回、パレスチナで活動している滞在時期に「パレスチナの人々の被占領状況をチェックし、生活が平和に継続されているか」調べる事も、我が「奉仕団」の重要な使命となっている。イスラエル＝シオニスト政権は、常に、パレスチナ人を虐げて、少しでも早く被占領地から、パレスチナ人を追い出し、被占領地もすべて、イスラエルのものにしようと、考えて、実行することを、国家任務と考える人々である。

ご存知のように、２年前、2014 年８月から～９月にかけて、イスラエル軍がガザ地区を 51 日間も大規模な空爆を行った。ガザは甚大な被害をこうむった。

その状況を簡単に振り返ることからこの報告を始めたい、と考える。

＜イスラエルによる「植民地支配」の鉄則＝分断統治手法＞

「そもそも論」でいえば、パレスチナ問題の発端は、イスラエルによる不当な「軍事的・植民地的支配」にこそ、その原因がある。イスラエルの建国 (1948 年) 以来、二分の一世紀以上も、武力による植民地＝軍事支配が継続され、その国際法違反の状況を、国際社会が、見て見ぬ振りをし、そのいびつな状態の根本的解決を放棄し、現在にいたっている。この正義をないがしろにしている国際社会秩序も、大きな問題の一端である。

今、パレスチナは「ヨルダン川西岸地区 (＝パレスチナ自治政府)」と「ガザ地区 (= ハマス政権)」に分断されている。この二つの政権を隔てている距離は、道路上にして、わずか約 80Km くらいの距離である。しかし、このわずか 80km、車で１時間の距離ガ、政治的には、「永遠に交流が閉ざされている」絶望的な遠さを意味している、と言わざるを得ない。

その分断政策によって、実際に「ガザ」と「西岸」との交流が 10 年以上にわたり、無い状態を強いられている。家族、兄弟が分断されている。

＜なぜ、イスラエルは分断統治をするのか＞

この分断統治こそが、パレスチナ人の抵抗・団結力を半減する効果がある。その手法は、アッバス議長率いる「パレスチナ自治政府」をイスラエルとアメリカ側に、引きよせて、手なずけている。その一方で、世界のマスコミカの 90％以上が欧米系の報道機関が支配している。その欧米系のニュースでは、「ガザのハマスについて、報道するとき」は常に、「ガザ地区を実効支配しているイスラム原理主義組織、ハマスは～」と表現している。そう表現することで、常に、ハマスを欧米に対する「敵対的勢力（＝いわゆる、テロリスト）として位置づけている。だが、実際にガザ地区へ行くと、ハマスはガザ地区で、早朝のランニングをしたり、地区内で元気なだけで、実際に日常のインフラなど、「電気、水、税金、入管コントロールなど、ガザ地区の「首の根っこ」は、すべてイスラエルが支配している。マスコミのプロパガンダには、誤魔化されてはいけない。

＜ハマスは総選挙で選ばれた第一党であった。＝ 2006 年＞

ハマスが 2006 年のパレスチナ最初の議会総選挙で、第一党として、勝利したときに、ハマスが「イスラエルを和平の交渉相手認めていなかった政策」を恨みに思って、常に、「イスラエルとアメリカに対して敵対的なハマス」として、「自治政府」と分断し、その後も一貫して、「西岸地区のアッバス政権」と「ガザ地区のハマス政権」を区別して、まさに、「飴とムチ」の分断統治政策として選択し、現在に至っているのである。また、この政策で、常にパレスチナの団結力が、そがれていることは否めない。

＜ジェノサイドとしてのガザ空爆攻撃＞

イスラエル国防軍による空爆が、なん

と、51 日間（＝７週間以上）も、一方的に、継続された。しかし、この空爆という軍事攻撃は、従来の「戦争」という呼称で呼べるものではない。なぜならば、それは、「イスラエル国防軍＝正規軍による、非武装の民間人＝ガザの市民を殺戮している状況」であり、明確に非戦闘員＝市民に対する軍事攻撃テで、「ハーグ陸戦条約違反である。それはジェノサイド (= 民族浄化) と、呼称すべきものである。

なぜならば、ガザ地区を訪問すると、解るけれど、空爆された北部のガザ地区も、イスラエル兵士が戦車とともに、侵入してきた南部野ラファ地区も、「市民が普通に暮ら生活区域」であり、非戦闘地域以外の何物でもないからである。

そのことをガザ地区を訪問することで、明確に理解できた。

＜ガザ地区の被害の概略＞

死者：2205 人、負傷者：11.000 人、家屋破壊 18.000 戸
病院施設 全壊：23 件、半壊：23 件、救急車：47 台
学校施設 全壊：26 件、半壊：122 件 被害総額 千億円
イスラエル側死者：71 名 (うち民間人 4 名、外人 1 名)

どこの世界に、正規軍であるイスラエルの空軍と陸軍が (しかもその戦力ガ世界の十指入る力量を誇っている)、住民が普通に住んでいる居住地に、51 日間も、空爆と陸軍に拠る「戦争」を継続することが許されるのであろうか？

しかし、現実にこの様な反人類的な「ジェノサイド」ともいうべき「民間地区への空爆」がイスラエル軍によって、行われ、51 日間も、国連を冠にする国際社会が、暗黙に了解 (＝黙認) したこと、この不正義をどう解すればいいのだろうか？

＜最近の人権状況・・・「第三次インティファーダー」が再燃！？＞

さて、パレスチナを訪問する度に、「被占領地パレスチナ (ガザも含む)」に対するイスラエルの軍事力支配が強化されている厳しい現実を痛感する。すでに８年間訪問しているので、定点観測と時系列の観測を重ねると、エルサレムのパレスチナ人の暮らしの変化が少しずつ理解できてくる。例えば、エルサレム市内のイスラエル兵の駐留数が特に、ここ２～３年の間、急に増えてきたこと、それだけ、弾圧というかイスラエル人の抑圧が強く感じられてくる。

地方都市においても、たとえば、ヘブロン市、ビリーン村なども同様で、域内のイスラエル人・入植者の数と振る舞いが横柄になっていることを知ることができる。

その結果、現在のパレスチナの若者たちが非常に閉鎖的な状況に追いこめられている。アメリカのイニシアチブでスタートした「中東和平」も 2014 年 4 月に頓挫している。その原因は、いろいろあるが、致命的なのはイスラエルの国際法違反の「入植地拡大」の姿勢でしょう。

和平交渉の失敗で、パレスチナ人の人権状況は絶望的な状況になっている。パレスチナ人の家が壊されて、イスラエルの入植地が、一方的に増大している。難民キャンプはイスラエルの国軍により攻撃されるので、やむを得ず「投石で抵抗する若者たち」待っていましたと、国軍は水平撃ちで攻撃する。当然若者が殺される。「この挑発的イスラエルの軍事攻撃 VS 投石」の構図が、昨年の 10 月から続いている。

アッバスも手の打ち様がなく、次の一手が見えません。そんな絶望的な状況の中で、SNS などを通じて、若者の反乱が広がってきた。いわゆる「一匹狼的」闘いだ。個人が身近な武器を、たとえば、ナイフや車ですぐそばのイスラエル人攻撃が急速に広まって、ここ半年で約 200 人以上の若者がその結果として。日常的に殺されてきた。非常に、切羽詰ったプレッシャーにうめき声が聞こえそうだ。

＜逮捕される「自由」の状況について＞

残念ながら、イスラエル兵は逮捕するために、裁判所に、逮捕状など、請求する必要など、まったくない。「行政拘禁」という「天下の宝刀」を持っている。イスラエル当局はパレスチナ人を裁判にかける代替手段として「行政拘禁」を長く利用してきた。成人であろうが、少年であろうが、嫌疑をかけられれば、(つまり、イスラエル兵の自由意思で) いつでも、どこでも , だれでも、「行政拘禁」される (自由) 危険性が保障されている。当局は「行政拘禁」命令によって人びとを起訴なしに勾留することができ、無期限に命令を更新できる。

イスラエルの法律では、逮捕されたパレスチナ人の裁判はすべて、軍事法廷で

＜写真説明＞　空爆後 1 年 7 ヶ月も経つとイスラエルのガザ支配による復興作業の妨害があるとは言え、さすがに「空爆の爪痕」を探すのは困難だ。ここガザ地区北部のベイト・ハヌーンで、わずかな瓦礫の中、少年が金目になるものを探していた、のだろうか。
(撮影：白山)

行われるから、もちろん弁護士などは用意されない。そもそも、裁判など行われないのだ。拘禁されたら、いつ釈放されるか？誰も知らない。拷問と自白の強制を強いる劣悪な刑務所拘留が永遠に続くだけ。イスラエルは建国以来非常事態宣言が出たままになっており、そのため「行政拘禁」が可能であるとされる。犯罪の有無は問題とされず、テロ対策の名目で、主にパレスチナ人を拘禁している。2005 年現在、収監されているパレスチナ人約 8,043 人中、722 人が行政拘禁の適用者である。

この状況は一向に、改善されていない。NGO の「ヒューマン・ライツ」や「オックスファム」などがニュースレターで抗議声明などを発信しているが、国際社会は「頬かぶり」でスルーだ。

パレスチナう人が置かれている社会状況はざっとこんな人権状況なのである。

最近はこの現状に絶望して、ガザ地区においては、自殺する若者が増加していると、聞く。

また、絶望した若者が「一匹狼的行動」で、ナイフで切りつけたり、自動車に乗って、イスラエル人が集まる場所に突入する事件がこの半年以上続いている。あまりにも先が見えない人権抑圧への抗議が連鎖している。

昨年の 10 月から「ローン・ウルフ」的抵抗運動で殺されたパレスチナ人は 200 名以上、との数字がある。一方で、イスラエル人の死者は 28 人との数字。

現在イスラエルの刑務所に収監されているパレスチナ人は、成人で 7.000 名以上、18 歳以下の子供たちが 190 人以上いると、いわれている。(ネットから転載)

「第６次パレスチナ・ガザ医療支援活動」報告　／　「第７次ガザ地区臨時医療支援活動」報告

発　行　日　2016 年９月

発　　行　北海道パレスチナ医療奉仕団

発行責任者　団長　猫塚　義夫

〒 065-0019 札幌市東区北 19 条東 22 丁目 5-13　☎ 090 - 8274 - 3163

http://www.hms4p.com　E-mail : hokkaido.palestine@gmail.com

支援募金振り込み先

振替口座 : 02720-9-100675　振込先口座 : ゆうちょ銀行 二七九店 (279) 当座 0100675

印刷・製本　メディアデザイン事務所マツモト